山名氏 赤松氏 研究ノート

第1号

序にかえて……金井元彦

供養塔建立に思う……山名晴彦

ほんとの犠牲者は誰？
—嘉吉の乱の再検討……川濱一廣

歴史は生きている……田中一郎

佐治のやまんどさん……中島憲仁

有感 山名 赤松 和解式……萩原初治

赤松軍と山名軍の合戦史……宮田靖國

中世備後国と山名氏……山名年浩

山名・赤松両氏の黄昏……吉川広昭

山名氏 赤松氏 両軍陳歿諸霊供養塔建立の記……事務局

あとがき

平成2年5月

山名 赤松 両氏顕彰会

供養塔 全景

南千畳の城壁を望む

完成した 宝篋印塔

序にかえて

拝啓　山名赤松両氏供養塔建立問題に付き種々御配慮賜わり厚く御礼申し上げます。

拙宅は国侍にて赤松の幕下であり祖先より七代迄は太尾姓と云う事になって居りますが内容は全然分りません。酒井姫路藩公に仕える迄は榊原藩公に仕官して居りました。以上の状況ですので会友として寸志を寄附させて頂きます。甚だ延引且些少にて失礼ですが御了承願い上げます。

三月三日

編集部註　太尾城は神東郡陰山郷太尾村（現姫路市豊富町太尾）にあり、播陽古城記には城主に太尾兵庫頭与次の名がみえる。

供養塔建立に思う

山名晴彦

平成二年五月二十六日。この日は赤松・山名両氏の歴史に新しく一頁を加える記念日となろうと思います。

顧みますと両氏は、村上源氏赤松氏と清和源氏山名氏、南北朝時代の南と北、共に室町幕府四職の雄、さらには本領播但の地が背中合わせなどという因縁から戦国百数十年もの間攻防に明け暮れました。武門の習とはいえ痛ましい限りです。

それが今日、かって先祖の面々も願わなくはなかったであろう和解提携という機運に遭い、ここに両軍慰霊の供養塔が建つのです。

ささやかな碑ではありますが、日本史千五百年、他に類例をみない快挙ではないでしょうか。どうかこれを縁として、ただに両氏末裔ばかりではなく、世の多くの方々に、人間の生きざまを思い入っていただきたいとねがうものであります。

（全国山名氏一族会総裁
村岡山名氏第十四世）

ほんとの犠牲者は誰？

―嘉吉の乱の再検討―

川濱一廣

山名氏と赤松氏とが、播磨国の領有をめぐって抗争を繰り返すきっかけとなったのが、〝嘉吉の乱〟である。この事件は、通説として、反逆者は赤松満祐で、犠牲者は将軍義教と言うことになっている。しかし、この事件の経緯を仔細に調べてみると、ほんとは誰が犠牲者であったのか、わからなくなってくる。

そして最後には、みんな、そうならざるを得ない宿命を負うて生れあわせた人々によって演じられた、人生劇ではなかったのか、という感慨に打たれるのである。

一、くじ引きできまった将軍。

足利募府第四代将軍義持は、応永元年（一三九四）九才という若さで将軍職をついだ。幸い斯波義将らの補佐によって、比較的平穏な生活を送ったが、漸く職に飽きて、応永三十年（一四二三）その子義量に譲り、出家して道詮と号し遊楽な生活に入った。しかるに義量は生来虚弱な体質の上に、酒を飲み過ぎて健康を害し、将軍職二年、応永三十二年（一四二五）僅か十九才で死んでしまった。やむなく、義持が再度復帰して政務をみたが、これも三年で、正長元年正月（一四二八）死んだ。四十三才であった。

義持には、もう後嗣とすべき子がなかったので、弟の中から選ぶしか方法がなかった。時の管領畠山満家は、諸将と相談の上で、四人の弟―いずれも早く出家して寺に入っていた―青蓮院門跡義円・大覚寺門跡義昭・梶井門跡義承・香厳院尊満を、六條八幡宮に集めた。

満家が、しかめ面で、四人に向い、

「唯今よりクジを引いてもらいます。クジに当った人が、本日から六代将軍になってもらいます。」

クジに当ったのは青蓮院義円であった。彼は名も義教と改めて将軍の座についた。

二、将軍義教の性格。

1. 人には厳しく、己には甘い。

今まで、お寺の中でひっそり仏に仕える修業の生活が、一夜あけると、日本一の権力者の座に着いたのであるから、あまりにもその変化の大きさにとまどったことであろう。

その彼が、第一に手をつけたのが、宮中に於ける風紀の粛正であったという。

当時の宮中では、公卿と女官たちとの仲がルーズになっていたと言う。しかし、それももとはと言えば、前将軍の義持が、宮中に入りびたって、女官と関係したりして、男女関係をルーズにする手本を示した結果だともいわれている。

義教は、将軍宣下を受けた永享元年（一四二九）の翌年五月に、宮中に対して、

一、宿直の女官と、近侍の公卿とは、席を混合してはならない。

二、女官が、男子に対して面接する必要の時には、壁を隔てて申すべし。

と厳達し、ちょっとでも噂の立った公卿達を厳罰に処したという。

当時のことを詳しく記録した『後鑑』の、永享六年六月十二日の頃に、

「凡そ左相府（義教）政務以来、所録を収公し、ま

た籠居を命ぜられる者、七十余人に及ぶ」とある。

その内訳は、公卿五十八人、僧侶十三人、女官四人、計七十五人が処罰されている。

東坊城益長は、儀式中に失笑したとのことで、所領二ケ所とり上げ、閉門を命ぜられた。また、侍女小納言局は、申次の誤りで、髪を切られ、寺へ入れられてしまったと言う。

それだけ、他人に対し厳しかった義教自身の女性関係はどうであったかというと、正室の（日野）尹子の外に、九人の側室があったという。

関白殿息女・衛門亮殿・小宰相殿・洞院殿息女・北向様・小弁殿・左京太夫殿・日野鳥丸殿・尹子の妹日野重子の九人である。

本人は、こんな事は、将軍の特権であって他人から非難されることでないと己惚れていたようであるが、不満を抱く人が多くあったことは、想像に難くない。

果たせるかな、永享六年六月九日の夜、日野中納言の邸宅に賊が忍び入り、正室尹子、側室重子の兄、義資を殺して、首を切った者があった。

えてして、他人を責めることに急な者ほど自分に甘いと言われるが、義教などは、その典型と言わねばならない。

2. 遊び好きの、美食好き。

公卿や家臣、弱い侍女などまで叱りとばし重い罰など加えながら、将軍は何をしていたかと言うと、毎日のように、寺院や部将宅に出向いて接待を受けていた。

試みに、『後鑑』の永享十一年六月の項をのぞいてみると、

二日	景徳寺
三日	等持寺
六日	相国寺
七日	乾徳院
八日	天龍寺
九日	鹿王院、三宝院
十一日	瑞雲院
十二日	西芳寺、赤松満祐亭

十三日　鹿苑院
十四日　靈鷲寺
十五寺　正持庵
十七日　小松谷
十八日　清水寺
十九日　保安寺
二十日　靈松院
二十一日　春熙軒、山名持豊亭
二十三日　竜雲寺、赤松満祐亭
二十四日　鹿苑寺
二十五日　金剛院
二十六日　泉涌寺
二十七日　長福寺
二十八日　雲居庵
二十九日　細川持之亭
三十日　北野宮寺

「将軍お成り」とあれば、寺院でも、部将亭でも、精いっぱいもてなしたにちがいない。毎日が遊楽三昧、これでは、本職としての将軍政務はどうなっていたのか。あきれざるを得ない。しかも、不思議なのは、今月二回までも、赤松満祐亭に出向いていることである。

3. 目ざわりの者には強圧

将軍義教にとって、最初に目ざわりになったのは、関東管領足利持氏であった。

関東管領と言うのは、足利尊氏が、長子義詮を二代将軍とすると共に、次子基氏を鎌倉に置いて、関八州を統括させたのが始めで、後には、奥州をも併せ統治させたもので、相当有力なものである。

その基氏から四代目が持氏である。義持将軍が死んで、後嗣がない事がわかっているので、持氏は、京都に上って将軍になるべく、内々運動もしていたのであるが、彼が軽率な人間であることを知っていた畠山満家は、これをしりぞけ、クジビキで将軍をきめてしまった。

不満やる方ない持氏は、「還俗将軍何する者ぞ」と軽く見、幕府の命令に対しても、しばしば反抗の態度

を示した。

このような持氏に対して、義教は、将軍の威光を見せてやろうと、永享四年九月に、富士山見物へと駿河国に出かけて行った。供奉の軍勢六千余騎、昔、源頼朝が催した、富士の裾野の巻狩にも優るものであった。

持氏の方も、あくまでも強気で、出迎えもしなければ、一行に加わろうともしなかった。

こんな持氏に対して、執事の上杉憲実は、いろいろ諫めていたが、持氏は聞こうとしない。だん〳〵二人の仲は気まずくなり、遂に永享十年八月、決裂して、憲実は、領国上野国白井に走った。一方持氏は、憲実討伐の軍を起こした。

憲実は、将軍に対して、救援方を懇請した。

将軍義教は、時こそ来たれと、関東、奥羽の諸将に、持氏追討の令を下した。

持氏は、幕府の軍に攻められて敗れ、捕われて、鎌倉の永安に押しこめられた。執事の上杉憲実が、助命の歎願をしたけれども聴き入れられず、永享十一年二月十日、自害して果てた。四十二才であった。

持氏には、安王丸、春王丸、永寿丸と三人の子があった。持氏の残党が、この三人を奉じて、下総国結城の結城氏朝を頼り、関八州の豪族に呼びかけて、反旗をひるがえした。

幕府は、すでに隠退して、伊豆の寺に入っていた上杉憲実を口説き落して総大将として結城の城を攻めさせ、城遂に落ち、氏朝ら皆戦死し、安王丸ら三人は捕えられ、永享十三年（改元して嘉吉元年）五月十六日美濃国垂井で斬られた。安王丸十三才、春王丸十一才そして六才の永寿丸は、おくれて処分される筈のものが、六月二十四日、義教の死によって命助かり、後に古河公方足利成氏となった。

次に目ざわりになったのは、弟の大覚寺門跡義昭であった。もともとこの人は、「性慈仁にして、大慶量の人物」と評されたことのある人であったが、クジに外れ、異母兄の義教が将軍になったのを見ると、やっぱり不満な心がくすぶり始め、永享九年七月、寺を出、

京都も捨て、大和国の越智維通を頼り反旗をひるがえした。

義教は、四職の一人、一色義貫とその兄土岐持頼に討伐を命じた。反乱軍は京軍に敗れ越智は斬られ、義昭は九州へ逃れて島津氏を頼ったが、義教の憎しみは強く、島津忠国に命じて斬らせた。嘉吉元年三月十三日、義昭は、三十七才、短い生涯の幕を閉じた。

次に義教によって理不尽に殺されたのは、一色義貫・土岐持頼兄弟である。この兄弟が大和へ討伐に出かけている留守中に、義貫の夫人が美人なので、義教が殿中に召したところ、夫人はカゴの中で自刃してしまった。これが知れると都合が悪いので、刺客を向けて、軍中で、兄弟を殺してしまった。

（巷間では、義教は、一色義貫夫妻や土岐持頼の幽霊がつきまとって苦しめられていたと噂されていたと『応仁略記』にある。）

4. えこひいき

権力の座にある人の評価は、もちろん、本人の力量によって評価されるのが、第一義であるが、側近の善悪によって、相当左右されるものである。一般的に、阿諛迎合する者が愛せられ、直諫する者はしりぞけられる事が多いものである。

将軍義教も、その例に洩れず、彼に愛せられた者は、美男子で、おべっかの上手な者たちであった。

代表的な者は、一色五郎に赤松貞村である。

一色五郎教親は、伯父に当る一色義貫が、将軍に殺された後、その所領をたくさん貰った男であるし、赤松貞村も、永享十二年の三月に、一族の赤松伊予守義雅（満祐の弟）の所領を、将軍がとり上げて彼に与えたものである。義教将軍が、赤松満祐邸に赴いた時ももちろん随従して行って居り、将軍が殺される時、二人ともいち早く逃げ出している。

三、赤松満祐と言う人物。

法雲寺蔵の赤松大系図によると、赤松光範の第五子であったが、義則に養われて、その職をついで、左京

太夫、大膳太夫、播磨・備前・美作三国の守護職を兼ねた実力者である。

応永十八年～二十年にかけては、幕府の重職である侍所頭人になっている。関東管領持氏叛乱の時なども戦功を建てている。しかし、将軍からは、毛嫌いされるところがあったものと見えて、応永三十四年（一四二七）将軍義持が、満祐の所領三国を奪って、一族の持貞に与えようとしたことがあった。怒った満祐は、自邸に火をつけて、播磨に帰ってしまった。義持は、細川持元・山名満凞をやって討たせようとしたが、諸将が、持貞の驕奢無礼であることを将軍に訴えたので、かえって持貞が自殺したので、満祐は許され、これを機会に剃髪して、性具入道と称して京都に帰った。

その後も、正長元年～永享四年まで、侍所頭人に再任、更に永享八年～十年頃に三任、幕府の枢要の地位にあった。ところが、将軍とはどうもウマが合わず、義教は、持貞の兄満貞の子貞村を偏愛して、又々所領を奪われるかも知れない機運を察して、機先を制して、将軍殺害の挙に出たのであった。

結び

はじめにも書きましたように、義教と満祐の関係は、相性が悪くて〝嘉吉の乱〟という劇を演じたわけであるが、人間的には、満祐の方が、きまじめで、幕府を支える人材であったのに、偏質性格の将軍のために、窮地に追いつめられ、〝窮鼠が猫を咬〟んだわけであったと思う。

歴史は生きている

○過去があって現代があり、そして未来へとつづく
○山名・赤松両氏関係の概略を平易に書いてみた

（竹田）
田中一郎

目　次

一、始めにひとこと
二、町民に歌われ続けている山名・赤松氏
　○地元小学校歌　○運動唱歌
　○和田山町民歌　○和田山町音頭
三、歴史に生きる竹田小学校「城跡の庭」
　○生き続けている歴史―写真資料
四、山名氏と但馬と竹田―そのあらまし
　○山名氏の出自
　○山名氏の基礎固めをした時氏
　○山名氏系図（史料）
　○山名氏の本拠此隅山城　○生野町大明寺
　○月庵に心酔した時義と時熙　○月庵と老狼
　○明徳の乱　○豊岡市史「こぼれ話」
　○嘉吉の乱―山名・赤松両氏の争い

五、応仁の乱と山名氏
○夜久野が原の合戦と「内藤塚」
○人間としての山名宗全
六、赤松広秀の民政と史跡竹田城址
○城跡をどう見るか
○山名・赤松両軍の供養塔建立
○赤松広秀と藤原惺窩「広秀を悼む和歌三十首」
○「看羊録」と「姜沆」のこと
○広秀の民政
七、山名・赤松両氏結縁の町づくり
―観点を変えて考える。
○終わりのことば

参考文献

○兵庫県史　○但馬史（石田松蔵著）。豊岡市史
○看羊録（姜沆）　○赤松を悼む歌三十首（藤原惺窩）　○城郭大系（新人物往来社）
○和田山町の歴史　○朝日・日本の歴史
○生野町史

はじめに

山名・赤松両氏の交渉に関する事象をテーマにして書いてほしい。それは両軍戦没諸霊供養塔の開眼供養として小冊子を作りたいから――と、顕彰会からご依頼を受けたのが一月下旬であった。

三月末日までにまとめて下さいとある。

二か月あるとは言うものの年度末のこと故何かとせわしい。もちろんその実力もない。困ったことだと思ううちにも時間は流れていく。どうしょうかといらいらしていたある日、ふとこんなことに思い当った。

山名・赤松両氏抗争のくわしいことは、その道専門の学者におまかせしょう。幸いにも山名・赤松両氏に深い関係のある「史跡・竹田城址」のふもとに住んでいるわたし。「城と住民」との生きざまは毎日自分の眼で見ているし、わたしもその住民の一人ではないか。

そのことを書こう。

そして、山名・赤松両氏の流れを汲む方がたに、一

人でも多く知っていただこう。住民の血や肉の中には廃城となって四百年経た今日に至っても、脈々として生きつづけている山名・赤松両氏の願いを分っていただくことにしようと、思い定めたのであった。

読み返してみると、すべてにわたって不十分であり不行届きであって忸怩たる思いでいっぱい。

でも、小学校教育にもとり入れられ、町民歌として町民合唱の場にもうたわれている事実を知っていただくだけでもうれしい。

両軍戦没諸霊の安らかに鎮まりまさんことを祈りつつ、執筆の動機を申し述べ、始めのひとことととしたい。

（平成二年三月）

山名・赤松両氏は今も町民に歌われつづけている。

竹田校　行進歌

1　加都千石の　野をひかえ
後に樹徳の　山をおい
自然の美景に　包まれつ
人世の道を　きわめんと
日毎ねりゆく　身心に
竹田の健児　意気高し

2　歴史は遠し　幾十年
有終校の　昔より
花咲きかえり　かつ散りて
朝来の山を　飾るなる
高きいさお　しのばんと
登るも楽し　春の日に

3　霞も雲も　たちこめて
一つににおう　栗鹿山
遥なる青らん　おぼろげに
のどけき光　うらうらと
あふれて深き　みめぐみに
幸あるきょうを　楽しまん

4　清き流れの　朝来川
海国男子の　たしなみと
水どたたかう　夏の空
我らが肌の　色はえて
息をもひしぐ　鉄腕の
色にも見ゆる　すごやかさ

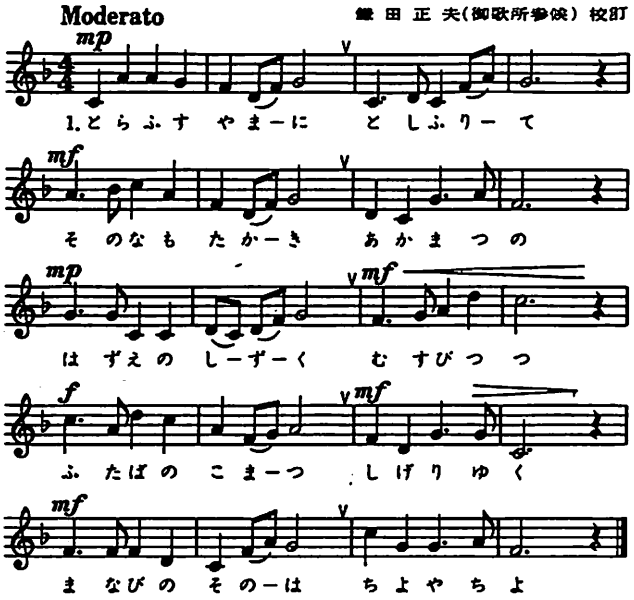
5　河鹿の声に　さそわれて
加都橋畔の　夕涼み
わけてたのしき　夏の宵
星ときらめく　蛍火に
文よむ窓を　訪い来るは
芭蕉の塚の　夜の雨

6　古城落日　夕陽の
光に映ゆる　諏訪の森
来る人もなき　たそがれに
誰をか招く　枯尾花
山名の雄図　今いづこ
虎臥城下　涙あり

竹田小学校校歌の一番には「虎臥山に年ふりて、その名も高き赤松の」とあり、戦前の卒業生には一入なつかしい竹田校行進歌の六番に「古城落日夕陽の――山名の雄図今いづこ、虎臥城下涙あり」と歌われつづけている。

竹田小学校 校歌

松田 龍太郎（第２代校長） 作詞
鎌田 正 夫（御歌所参候） 校訂



1 虎伏山に 年ふりて
その名も高き 赤松の
葉末の雫 むすびつつ
二葉(双葉)の小松 茂りゆく
学びの園は 千代八千代

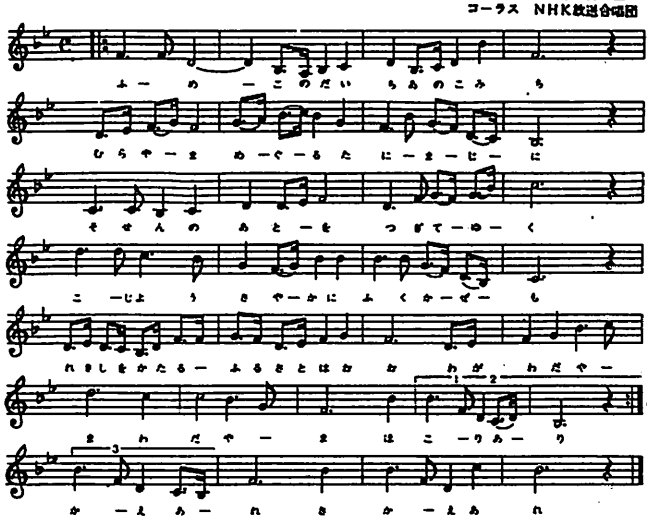
2 朝来の山に 咲きみちて
朝日に匂う 山ざくら
花の心を こころにて
あさ夕ともに 励むなる
学びの園は 国のため

町民歌と竹田城跡

町の公式行事の時に合唱する町民歌。その一番には「古城さやかに吹く風も　歴史を語るふるさとは」とある。ここにも山名・赤松は生きている。

和田山　町民歌

作　岡足　立重利
作曲　橋本　壽雄
歌　坂本　博士
コーラス　NHK放送合唱団



和田山町民歌

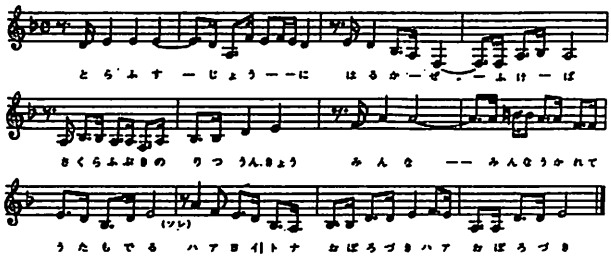
一、踏めこの大地　あの小道
緑山めぐる　谷間路に
祖先の路を　つぎてゆく
古城さやかに　吹く風も
歴史を語る　ふるさとは
おお　わが和田山　和田山
誇りあり

二、仰げ大空　その光
映して清き　円山の
流れの里を　彩どりて
さくらの花の　舞うところ
今をたえる　ふるさとは
おお　わが和田山　和田山
望みあり

三、結べ人の輪　心の和
五つの郷の　寄りそいて
但馬の南　伸びる町
いざもろともに　新しい
明日を目ざす　ふるさとは
おお　わが和田山　和田山
栄えあれ　栄えあれ

和田山音頭

作詞　林田八重子
作曲　中川　昌



一、虎臥城に　春風吹けば
桜吹雪の　立雲峡
みんな　みんな浮かれて
唄もでる
ハァーヨイトナ　おぼろ月
ハァおぼろ月

二、そよぐ背田や　緑をぬって
清い流れの　東河の川
しのぶ　しのぶ思いに
身をこがし
ハァーヨイトナ　飛ぶホタル
ハァ　飛ぶホタル

三、踊るゆかたに　花笠ゆれて
町は賑わう　地蔵盆
あがる　あがる花火を
君と見る
ハァーヨイトナ　恋の夜
ハァ　恋の夜

四、あおぐ大倉部　夕日に映えて
すそに広がる　石和谷
もみじ　もみじ色づきや
里の田も
ハァーヨイトナ　黄金色
ハァ　黄金色

五、床尾山から　木枯吹けば
雪の冠　かつらの木
白い　白いお山に
鳴く鹿が
ハァーヨイトナ　春を待つ
ハァ　春を待つ

夏の祭りを始め色いろな催しごとに際して、歌っておどって幅広く普及しているのがこの和田山音頭。出だしの歌詞が「虎臥城に春風吹けば」である。

歴史に生きる「竹田小学校城跡の庭」

竹田小学校長　下村登一

本校では三年がかりで、城跡のある古城山と学校とを結ぶ「城跡登山路」を造成し、平成元年秋には十三ケ月を要して全国でただ一つの「竹田城跡の庭」（縮尺二十五分の二）を竣工させました。

この城跡は「山名・赤松両氏ゆかりの史跡」であり、ふるさとを愛しその歴史と文化に親しむ心を育てるために、地教委の助言もあり、子と親と教師による汗の「教育づくり」として取り組んだものであります。

縄張りのすばらしさを示す城跡の石垣は、全児童が川原で集めた栗石でしっかりと支えられ、「南千畳」の一角には一人ひとりの「二十一世紀へのメッセージ」を収めたカプセルが、大切に納められています。

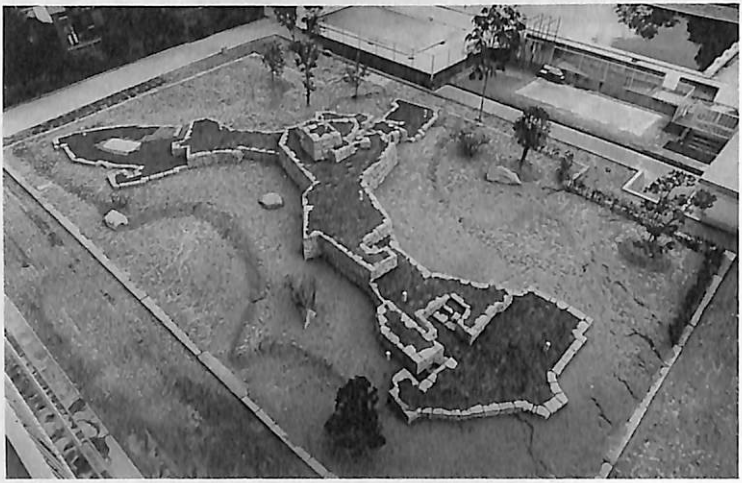
「二十一世紀の成人の日に、ぼくたちは必ず地球の各地からこの庭に集まって来ます」

「城跡の庭」は、ふるさとを愛する心の出発点であり、母校を巣立つ子らの心のふるさととして、永く雄々しく本校の庭にたたずまいつづけることでしょう。

生きつづけている歴史

―竹田城址の場合

竹田小学校庭に作られた竹田城跡の模型、―子と親と教師との合作による。



（東の丸から天守曲輪を望む）

廃城になってから約四〇〇年。今なお住民は当時のことを語り継ぎ言いつぎして、今日に至っている。

山名氏と但馬と竹田

○そのあらましについて

山名氏の出自はどこか

山名氏は、新田義重の長男・義範が「上野国山名郷」に所領を与えられた時から始まり、南北朝動乱に乗じて足利尊氏に従って活躍した。（上野国は今の群馬県。上州ともいう。）

やがて時氏が力をのばして、丹波国守護となったのが一三四三年（康永二年）のことである。

山名氏の基礎を固めた山名時氏

丹波国守護となった山名時氏は、領国の拡大をねらって一三四四年（康永三年）豊岡市新田・神美にまたがる三開山城を攻略する。後醍醐天皇の建武の新政から十年目になる。このころから、山名氏と但馬との結び付きが出来てきたと見てよいのではないか。

山名氏の家臣団となった最初の但馬の武士は八木氏であった。

八木氏の本拠地「八木郷」は古代交通路を考えるとき重要な地点である。

このころ時氏は「因幡・伯耆・丹波・丹後・美作」五か国の守護をしていた。その一つ伯耆国と京都を結ぶ道が山陰道である。

但馬の山陰道筋の国人層を手に入れていたのが八木氏であり、山名時氏が、但馬において足がかりとした

山名氏系図（上野国・山名郷出身）

- 時氏（五か国の守護が与えられた）
  - 師義
    - 満幸（氏清の娘が妻である）
      - 氏幸
        - 凞之
          - 教之
  - 義理
    - □
      - 教清
  - 氏冬
    - 氏家
      - 凞貴
  - 氏清②
    - 満氏
    - 時清
  - 時義①（但馬山名）
    - 氏幸
    - 時凞③（但馬で死没）
      - 持凞
      - 持豊（宗全）④（嘉吉の変 応仁の乱）
        - 教豊⑤
          - 政豊⑥（応仁の乱を終結させた）
            - 俊豊
            - 致豊（宗伝）→（村岡山名へ）
            - 誠豊
        - 是豊
        - 勝豊
        - 女（細川勝元室）
        - 女（斯波義廉室）

村岡山名系図

- 致豊
  - 祐豊（秀吉、但馬へ）（領国は但馬一国となる）
    - 棟豊
    - 氏熙
    - 氏政（尭凞）
  - 豊定
    - 豊数
    - 豊国（明治維新まで続く）
      - 豊政
  - 東揚

のは、養父・朝来両郡であったと言える。

ここは、「日下部氏」が栄えた地である。養父郡の日下部氏の流れの中で、朝倉氏は越前国で栄える。養父郡では、八木氏がぬきん出る。

朝来郡の日下部氏の流れの中では「太田垣氏」がぬきん出て、両者は後に「山名四天王」の中に数えられた。

朝来・養父の両郷は京都への進攻路に当っているので、但馬を握る拠点となることはいうまでもない。

この地の国人を握ることに苦心した時氏の眼識は高かった。

山名時氏は、一三六八年（応安元年）家督を総領の師義にゆずった。

師義の代に入って、一三七二年（応安五年）山名氏は但馬守護となった。

山名氏の本城・此隅山城（出石町宮内）

時義は出石町宮内の地に此隅城を築城した。此隅山は標高一四〇メートルで決して高い山ではない。が、出石、豊岡地方を眼下に見下す絶好の要地である。

城の西方には、日本書紀に書かれている古代但馬を開発したという「新羅の皇子・天日槍」を祭神とする但馬一の宮「出石神社」があり、豊臣秀吉が但馬征伐を行なうまで、山名氏の但馬支配の拠点であった。

特に山名時義の系譜が嫡流を名のり「但馬山名」として勢威を誇るのであるから此隅山城は「但馬支配の中核の城」とも言えるし、時義一族は山名総本家の地位を動かないものにした。

但馬山名初代の時義は、晩年をほとんど但馬で暮らし上洛しなかった。

但馬で病没したのが、一三八九年（康平元年）四十四歳の若さであった。

竹野町の円通寺に葬られている。

但馬一の宮「出石神社」

日本書記にあるように、新羅皇子「天日槍」を祭神とする但馬国一の宮。

山名氏の信仰も厚く、戦時に際しては「此隅山城」と結んで據点となっていた。

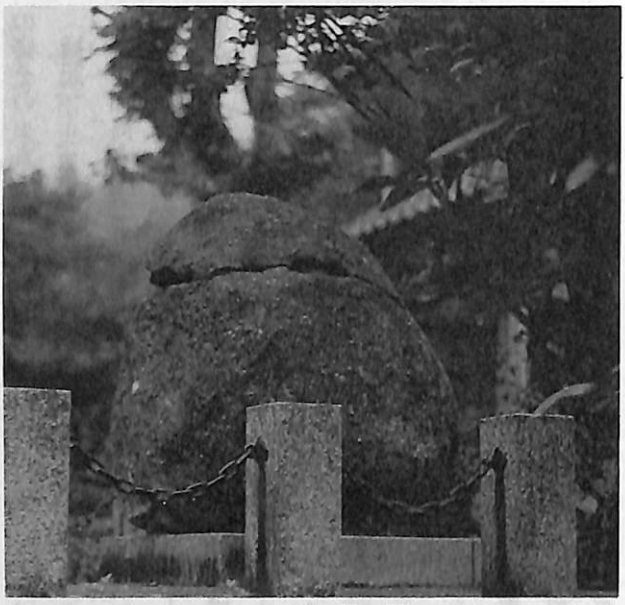
時義と月庵

―生野町・大明寺の座禅石

大明寺の本堂・庫裏など、有名な座禅石は手前中央に見えている。

時義とその子「時凞」は「月庵宗光」に心酔していた。

月庵が開基したという寺は但馬に三か寺ある。生野町黒川の「大明寺」山東町早田の「大同寺」竹野町須谷の「円通寺」である。



座禅石

黒川は、先年関西電力の多々良木揚水発電の上部池ダムが構築されてから、一躍多くの人びとが出入するようになり、あわただしい趣きも見られるようになったが、「幽邃」さながらの土地であり、今もその自然は残っていて十分に当時をうかがうことが出来る。

大明寺には実に明朗闊達な住職がいらっしゃって、寺の歴史について興深く語って下さる。わけても「月庵坐禅石」の話がおもしろい。それは、月庵が座禅を組んで瞑想三昧、ひたすら求道の行をなさっているところへ、老いた狼がやってくる。よくよく見るとのどに骨を立てて苦しんでいる。老師が骨を除いてやられると老いた狼は大よろこび。

老師、狼に申されていわく。「今後はこの人里近くに出没して住民を恐れさせてはならないぞ。早く去れ」と。老いた狼は再びこの近くに来ることはなかったという。

座禅石は、当時をもの語るかのように、今も庭前に昔の姿そのままで残っている。（写真を参照されたい）

（補記）

月庵和尚が座して悟りの道を求めたという座禅石は、もとあったところが関西電力揚水発電のダム築堤工事地となったため、写真のように、現在は開山堂の横に移して安置されている。

明徳の乱

― お家の事情というもの

山名家の本流である「師義」の家の後見役に時義がなった。これは師義の直系の子「満幸」や、時義の兄である「氏清」にとって、心おだやかでないものがあった。

一方将軍足利義満は、かねてから守護大名が強大になることを恐れ、その勢力の増大しないよう考えていた。

山名時義の死後を受けて二十三歳の嫡子「時凞」が山名宗家を継いで但馬守護となり、弟の「氏幸」が伯耆の守護となったが、それに不平不満を持っていた一族の山名満幸・氏幸らとの内紛を利用して、将軍義満は、「一族同志の争い」にうまく持ちこんだのである。一三九一年（明徳二年）のことで、世にいう「明徳の乱」である。氏清は討たれた。

結果的には山名時凞がわの勝利とはなったが、一族が相争ったため、時義の時代には、十一か国を占め「六分一殿」と言われていた強大な山名の勢力も落ち目となった。

ここにおいて、将軍義満の考えた山名同族を戦わせて勢力を削減し、終局的には「足利を固める」という作戦は、ある程度成功したといえよう。

足利時代のヒーロー山名持豊（宗全）と領国の但馬

時凞が死去するとその後継者は「持凞」であった。ところが時の将軍「義教」は陰険な性格であったらしく、持凞が募府への出仕を怠ったとして弟の「持豊」を立てた。

時凞の死によって、持凞と持豊との兄弟争いがあることは当然予想された。

持豊が父の時凞の三回忌を京都でとり行った直後、持凞は反乱を起こしたが、弟の持豊に滅ぼされてしまった。持豊は、ここにおいて山名宗家の主となった。山名宗全その人である。一四三三年（永享五年）三十歳の働き盛りであった。

豊岡市史によると、山名持豊（宗全）が領国の但馬に下向したのは、記録の上では三回あるとしている。

そしてすべてが「播磨出兵」に関係していた。

第一は、「嘉吉の乱」に際して、播磨の赤松満祐を背後の但馬から突こうとして一四四一年（嘉吉元年）七月、京都から但馬へ下向したときである。京都を経て但馬生野より播磨に入り赤松満祐を討っている。

第二は、一四四四年（文安元年）十一月、先の嘉吉の乱に論功行賞に不満を持ち、赤松満政を攻撃しようとして再び但馬に入った。

生野の真弓峠から播磨に討ち入り、目的を達して文定二年六月京都に凱旋している。

第三は、一四五四年（享徳三年）に播磨の赤松再興問題に関連して、将軍・義政の怒りを買い、但馬に在国して上洛するなとの追放令を受け、十二月六日に但馬に行き、一四五八年（長禄二年）まで「四年間但馬にいた」ことである。

持豊は嫡子の教豊に家督をゆずって隠居し、代りに持豊の子、教豊・是豊・勝豊そして孫の政豊が京都に出仕している。

この在国中に持豊・教豊らは、播磨国に攻め入り「赤松則尚」を討っている。

右に見るように、持豊が但馬に下国したのはすべて播磨の赤松氏のことに原因している。

山名氏はかって播磨国を所持していたが、「明徳の乱」で播磨を失ってから「播磨国回復」は山名の悲願であった。気候温暖で地味の肥えた播磨国は、領主にとって何としても魅力であった。

但馬に下った時の持豊の居所は、戦時においては此隅山城であり、平時には「豊岡・九日市」の居館を守護の在所としていた。

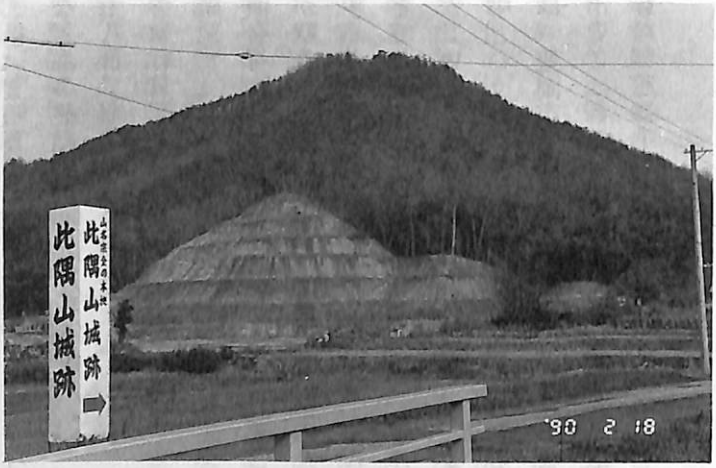
此隅城跡（出石町宮内）

山名時義は、「此隅山」に築城した。写真で見るごとく高い山ではないが、戦略的に見て絶好の場所。

後山名宗全はこの城を戦時の拠点とした。

此隅山の頂上には、やや広い削平地があり、東がわには階段状の削平地が残っている。

石垣はなく土塁の城であったのだろう。中世の山城としては貧弱である。「六分一殿」の山名氏の城としても小規模すぎると言える。



広報「とよおか」―こぼれ話より

山名宗全のまち。豊岡・九日市。

豊岡と言わず足利時代史のヒーローは、いうまでもなく「山名宗全」である。

幕府の重職として、日ごろは京都にいた宗全であるが、主として播州の赤松氏と争って軍勢をもよおすときや、将軍義教を殺し（嘉吉の変）宗全との戦いに敗れた赤松氏が、ふたたび復活しょうとした時、将軍義政をののしり但馬に退去させられた四年間は、但馬山名氏の在所である豊岡・九日市に在住していたのである。

このことからすると、豊岡こそが「山名宗全のまち」なのである。

但馬山名氏が在所を出石（此隅城・有子山城）に移したのは、史料から言って但馬山名氏後半のことである。

宗全は応仁の乱の一方の将として知られているが、一四七三年（文明五年）の死の前年には色いろの風評が立つなど乱の終結には心を痛めている。

三月十八日、七〇歳での死は

「東寺執行日記」「大乗院寺社雑事記」

「実暁記」　「見聞雑記」　「鎌倉大日記」

「和漢合符」　「応仁記」　「大乗院日記目録」

などが取り上げているが、歴史上の人物の死が、これほど多くの史料に報じられているのは、他に例を見ないほどである。

宗全が、いかに重要人物であったのか、しかも、応仁の乱中という時期もあってのことと思われる。

（右は、豊岡市史編集委員・山口久喜氏の書かれた「市史こぼれ話」の署名入りの文中から取材させてもらった。）

嘉吉（きつ）の乱と山名持豊

国内支配を強化するため守護大名を助けた幕府も、

大名の勢力があまりに強くなり過ぎて力の均衡が失なわれそうになると、それを防ぐための方途を実行した。

六代将軍「足利義教」は気性の激しい人で「悪将軍」と言われ、有能な武士九十名を処罰して「万人恐怖」とも称せられた将軍であった。

強い断圧に対しては、より強い反作用があることは歴史の示すところである。

守護大名「赤松満祐」も播磨国を奪われる心配をかねてから抱いていた。一四四一年、嘉吉元年六月二十四日、こともあろうに赤松満祐邸で酒宴たけなわの時、かねてからこのことをたくらんでいた満祐の指図により、部下数人の手によってあっけなくも将軍義教はその場に斬り殺されたのであった。

クジ引きに当って将軍になったと言われていた「クジ将軍」の末路である。

赤松氏の分国、備前・播磨・美作の国はもと山名の分国であったが、明徳の乱で失ってしまった。「山名」と「赤松」は、侍所四職のそれぞれ（山名・赤松・一色・京極）として対抗意識が強かった。

将軍義教殺害事件は、あまりにも突然のことで幕府方は為すすべを見うしない討手も出さずぼう然たるありさまであった。侍所の山名持豊に追討の命が出されたのは事件の役、十数月も経ってからであった。

持豊は山陰道の総大将として赤松満祐軍を攻撃した。赤松軍は生野峠付近を陣地として構え、山名軍もまた丹波から朝来郡に攻め来り生野峠を中心に攻防戦を展開した。

朝来の地は時熙以来、山名にとってなじみが深い。山名軍は力戦よく赤松軍を攻めて瀬戸内まで攻めこみ城山城（木山城）を包囲した。満祐は万策つきて城を枕に自殺、放火した。乱を起してから三か月、山名持豊軍の全面的勝利であった。

満祐は国人層を確かと味方に付けることなく戦いに

臨んだが、その協力を得ることが出来なかったのが敗因であったと考えられる。

京都に凱旋した持豊は、満祐討伐の第一功労者として赤松の旧領のほとんど大部分を手に入れて「播磨守護」となり、播磨・備前・美作三か国の赤松氏遺領を受け継ぎ、山名一族の領国は、但馬・因幡・但耆・石見・美作・備後・備前・播磨・安芸・伊賀の十か国となり、持豊自身もこの中の八か国を分有した。

かっての明徳の乱で失った勢力の大部分を回復したのである。

この時、持豊三十八歳。得意の絶頂であったであろう。

持豊が一応播磨の乱を平げその武勇に反抗するものがないことを示しはしたが、持豊への恐れをいだいている人たちは、何としてもその勢力を削減しようとする。それには、山名氏によって滅亡させられた「赤松氏再興問題」を利用しようと考える。その再興の地はどうしても故地である播磨において起きることになる。

こうして「反山名運動」は「赤松再興問題」であり、三回に及んでいるとされる。

特に「第三次赤松再興計画」は、「細川勝元」の指図によるものとして、山名持豊をしてひどく怒らせている。

応仁の乱と山名氏

東洋史の泰斗、内藤湖南氏

「近代日本を理解するには、応仁の乱以降の歴史を知らなければならない」とされたが、「朝日百科・日本の歴史」の所載による、横浜市大助教授・今谷　明氏の研究によると次のように発表されている。

「日本史を真っ二つに割るほどの重大な画期に位置する応仁の乱」とは、一体どのような内乱であったのだろうか。数ある内乱のうちでこの乱ほど目的・意図がはっきりしないわかりにくい内乱も珍しい。NHKのテレビドラマなどでも応仁の乱が題材になったこと

は先ずない。と言われてみるとなるほどその通りだと思う。

人気のない内乱ということであろう。

内乱にけ高い理念がない。将軍義政は酒宴に明け暮れしている。英雄と悲劇の主人公も表われない。

不人気の内乱に対して、今谷助教授は種々考察されているが、その成果をふまえて簡単にまとめてみる。

山名氏は「嘉吉の乱（前述）」の手がらによって、播磨・備前・美作三か国の赤松氏の遺領を継ぎ、これまでの但馬・因幡・伯耆・備後・安芸を加えて八か国の分国を持つ有力守護となった。

対する細川氏も、摂津・和泉・丹波・備中さらには、淡路・讃岐・阿波・土佐の八か国を所有する守護となり、この両守護家が瀬戸内海の制海権を両分する形で対立することになっていった。

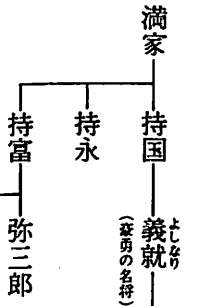
やがては、幕政の主導権を握るのは、山名宗全か細川勝元かという状態になって行くのは当然の成り行きであった。

以上が、乱勃発までの幕政の背景である。

このように政情は混乱し、山名・細川が対立していったことが乱の誘因となったが、「直接的原因は、畠山持国が一四四九年（宝徳元年）管領と山城国守護とを兼ねる」ようになり、二十年近く畠山氏が世襲した。

しかし、持国の死後は後を継いだ実子「義就」と猶子（養子のこと）政長との内訌（うちわもめ）が激しくなっていった。

畠山氏系図



「畠山義就」は東軍の「赤松政則」と並称される豪勇の将であり名将であった。持国の妾腹であったことがわざわいをして政長がかつぎ出された。

この畠山氏の内紛に際し、細川勝元は終始「政長」を支持した。

山名持豊は「義就」の才幹に注目して「義就支持派」となる。

その他、将軍義政の実子「義尚」の誕生によって、義政の後継者と決めていた「義視―義政の弟」との反目、将軍の決断のなさや無能も乱の一因であった。（従来は上記が乱の原因であるとされていた。）

主因は畠山義就・政長の争いにそれぞれ加担する山名・細川両守護の競り合いであった。

一四六七年（応仁元年）正月、政長は京都上御霊社境内で義就軍に戦いをいどみ、ここに前後十か年に及ぶ戦乱の火ぶたは切って落とされた。

緒戦は山名軍が優勢、勝元は地方で反撃に転じた。また細川勝元は勇将「赤松政則」に播磨・備前・美作の三か国を衝かせて山名軍を牽制するなど、両軍は各地にわたって虚々実々の戦いをくり広げている。

東軍（細川軍）十六万、西軍（山名軍）十一万という大軍に誇張があるとしても「傭兵集団」が主要戦力であるからには、長期間を京都にいることは無理であったであろう。

傭兵集団というのは、戦いの方法が南北朝このかた「歩兵の集団戦法」に変化していった。馬を射る方法や槍を多用するなどはその象徴である。さらには武士身分でない者の武力集団であるので、ゲリラ戦・不意討ち・待ち伏せなどを得意とした多人数の歩兵部隊であった。

一四七三年（文明五年）には総帥の山名持豊と細川勝元が相いついで死去、厭戦気分がみなぎった。

山名持豊の孫である「山名政豊」は、両軍の和平に力をつくし、将軍家から山城守護に補せられるや、勝元の子「政之」との間に和平の議がまとまった。

夜久野原の合戦—内藤塚のこと

応仁の乱において和田山町白井では「内藤塚」で知られているように、山名・細川両軍の間で激しい戦いが行なわれた。

一四六七年（応仁元年）五月下旬の戦いから戦局は大きく進んだ。東軍は不利で西軍が有利に戦いを進めたというわけである。

ところが播磨では、赤松の一族である赤松政秀が「赤松遺臣」を手なづけ多くがこれに従った。旧領を回復した政秀は、置塩城を本拠として追い討ちをかけ旧領美作を奪回してさらに備前まで進出した。

この作戦に応ずるかのように細川方は「地方攪乱」（正しくはこうらんとよむ）をねらって、分国の丹波から持豊の本拠但馬を強襲した。粟鹿・磯部を始め夜久野原一帯は、細川方の長九郎左衛門・内藤孫三郎・疋田夜久らの軍で満ちみちていた。

このころ山名の守護代は太田垣土佐守で、竹田城を預かっていた。嫡子、新左衛門宗朝は京都へ応援に行ったまま帰郷していなかった。竹田城の留守居は次男の新兵衛尉が守っていた。長・内藤らが丹波・但馬国境に侵攻したことを知ると、直ちに夜久野が原・東河に打って出て、三月二十日新兵衛尉は片木山城守らと徹底的な大勝利を得た。

内藤を討ったのは、新兵衛尉の家来、中路八郎三郎であった。

和田山町白井の「内藤塚」と伝えている小高いところには、石仏が数個立ち並んでいる。内藤兄弟を葬ったところと言い伝えてきている。

山名持豊はこの勝利を聞いて大いに喜び、将軍義満から賜わった「御賀丸」という太刀を新兵衛尉に、感状を八郎三郎に与えている。また太田垣光景の墓と伝える寛正六年（一四六五年）の石碑が常光寺にある。

山名宗全という人

応仁の乱で西軍の総大将となった「山名持豊――宗全」は「昆沙門天」の化身ともうわさされ剛勇な武人であった。

現実主義を主張する実力者でもあって、ついに管領細川勝元と応仁の乱で争った。

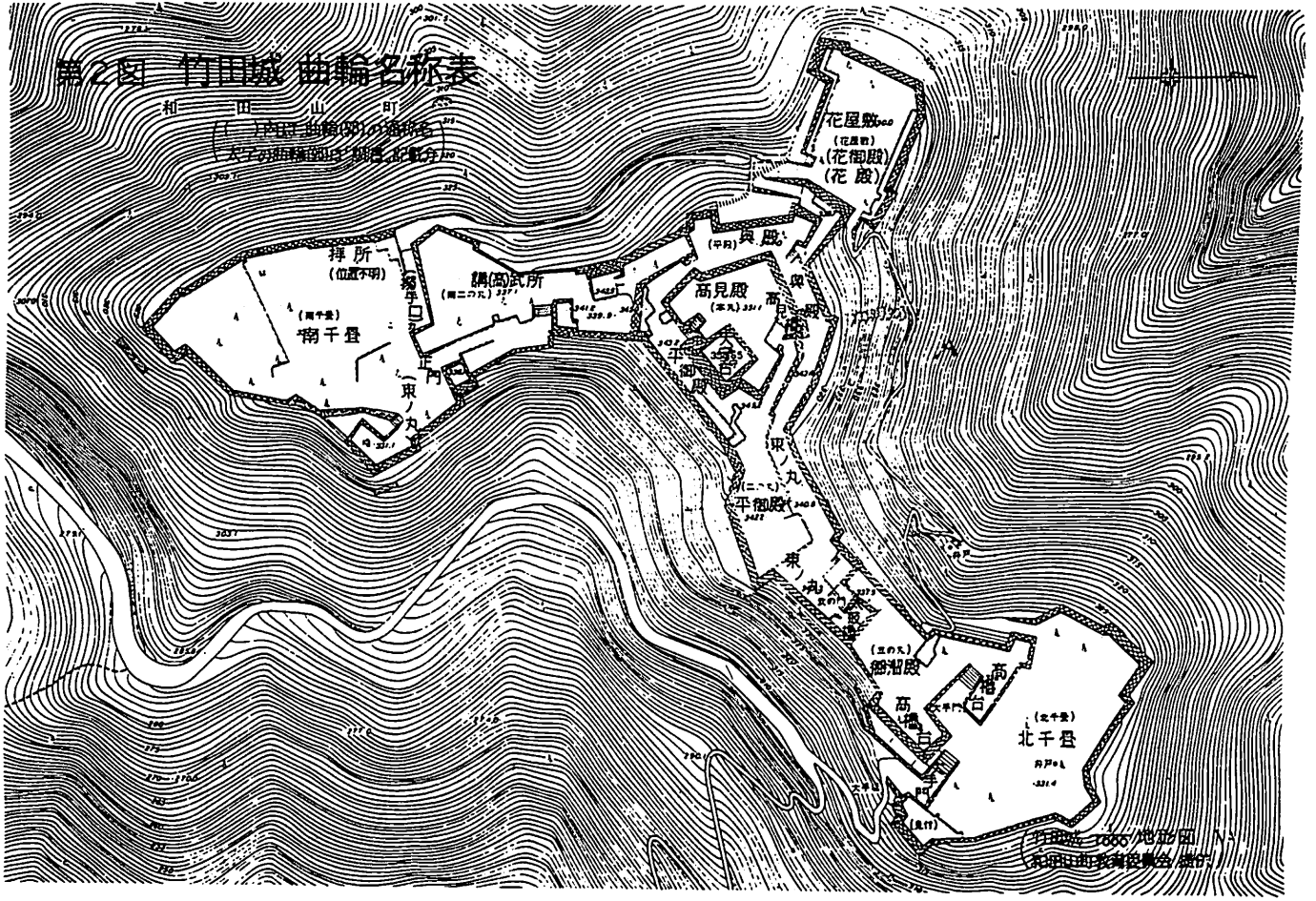
宗全はすぐれた武将であるとともに、和歌や連歌をたしなむ文化人でもあった。また、仏心も厚く京都南禅寺に塔頭「真乗院」を建立し、香林和尚を開山とし朝夕の礼拝も怠ることがなかった。

近年、朝来郡朝来町上岩津の真言宗「鷲原寺」（通称わしはらでら）に持豊が寄進したという十二神将が発見された。

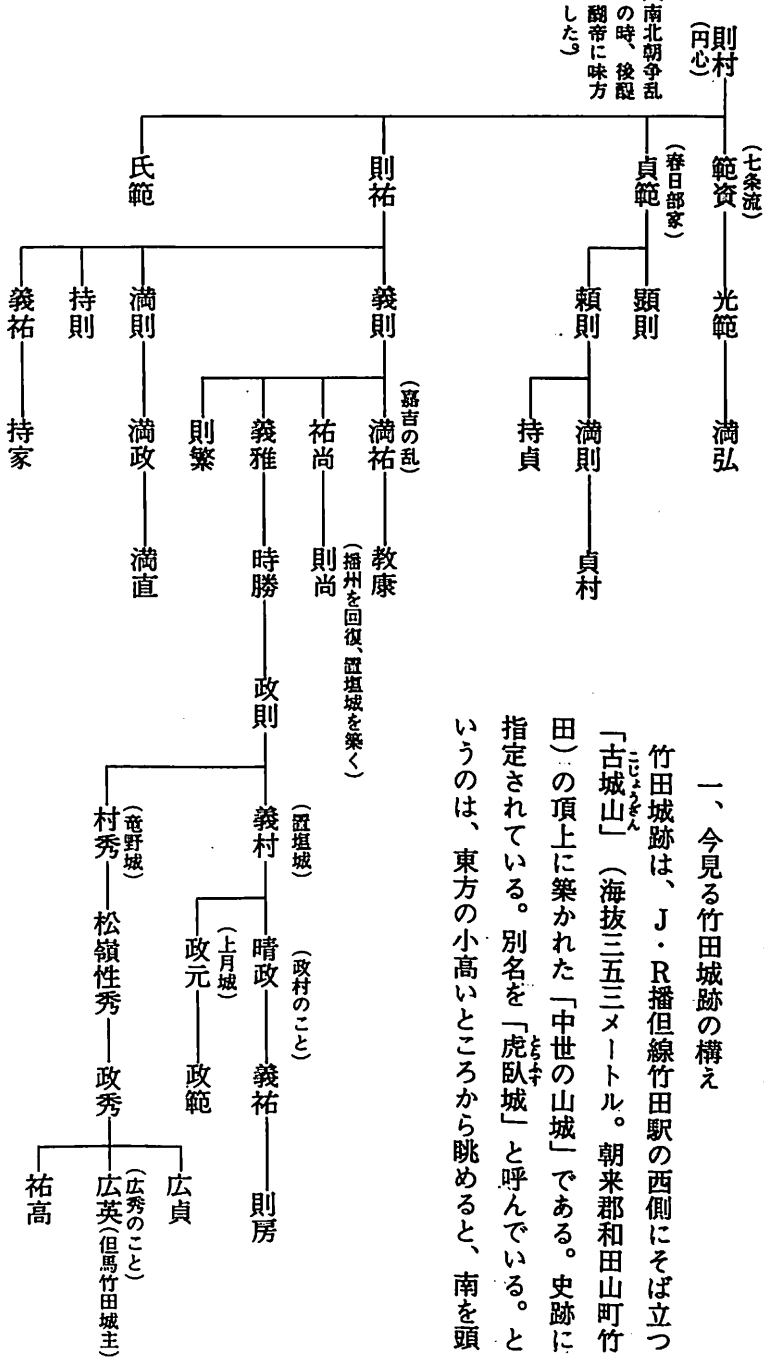
彼の信仰心の表われであるとともに、朝来郡との関係の深さを物語っていると言えなくもない。

赤松広秀の民政と史跡竹田城址

野面積の美を見せてくれる「竹田城跡」は、文禄から慶長の初期にかけて現在の遺構となった、と考証されている。


第2図 竹田城 曲輪名称表
利 田 山 町
南千畳
拝所
(位置不明)
搦手口
搦(高)武所
(南二の丸)
正門
東ノ丸
高見殿
(本丸)
奥殿
(中段)
高見殿
(二の丸)
平御殿
東ノ丸
東
花屋敷
(花屋敷)
(花御殿)
(花 殿)
(三の丸)
御湯殿
高
櫓
台
(北千畳)
北千畳
(馬場)
竹田城 1666 地形図
(太田由郎教育委員会 提供)

赤松家系図



史跡・竹田城址をしのび
赤松広秀を語る

一、今見る竹田城跡の構え

竹田城跡は、J・R播但線竹田駅の西側にそば立つ「古城山」（海抜三五三メートル。朝来郡和田山町竹田）の頂上に築かれた「中世の山城」である。史跡に指定されている。別名を「虎臥城」と呼んでいる。というのは、東方の小高いところから眺めると、南を頭

部にして北方に長ながと伏せている虎の姿態に似ていることから、だれ言うとなく言い伝え言い習わしてきたものと思われる。

項上の縄張りは、東西約一〇〇メートル、南北は約四〇〇メートルもあって、天守台・天主曲輪・二の丸・三の丸・北千畳・見付櫓・平殿・花屋敷・東の丸・南千畳と堂々たる構えが現存し、かっての日の偉容をもの語っている。

またこの城は、山名宗全の築城になるものと言い伝え、完成するにはほぼ十三か年を要し、一四三一年（永享三年）から一四四三年（嘉吉三年）までかかり、多くの農民が使役として動員され農地には小松が生えたと伝えられてきた。

ところで、最近専門家の研究によると現在我われが眼の前に見る壮大な遺構は、織豊政権成立当時、つまり「天正末期から文禄・慶長初期に築かれたもの」と決定づけられてきたことである。

それは次のような理由による。

ⓐ宗全のころに築かれた城塁は、どことも土塁や濠が主で、竹田城跡に見るように整然として大規模な縄張りではなかったし構築ではなかった。

ⓑ竹田城跡の石積みは「古式穴太流」の「野面積」である。

この様式の最初の城は「安土城」であり、安土城ならびに竹田城の修築をそれぞれ数か年にわたって手がけた。穴太流家元の粟田万喜三氏は「竹田城は、私たちの先祖が積んだものにまちがいありません。安土城を積んでからやって来たものです」と明言されている。だとするなら一五八〇年（天正八年）以降ということになる。

もっとも、織豊時代以前の山城の構築として、山名・太田垣氏の手になるものと考えられる立派な「たて堀」や「砦」が残存し、現城跡より北へ二五〇メートルほど行った、通称観音寺山には、とりでやたて堀が雑木林の中にはっきりと残っており、山名時代をしのばせるのに十分である。

二、竹田城跡の見どころ

竹田城跡の歴史的詮索はしばらく置いて、この城の見どころをズバリと申し上げたい。

ここ三、四年前から城跡に杖をひく人が本当に多くなってきた。土曜日曜などは四季を問わない。若い男女が一番多いが年配者も少なくない。クルマに乗っての人が多いが歩いている人も結構ある。城址から何かを求めようとしている人は顔付きでそれとわかる。いいことだと思うしうれしい。

「どんなところか一度登ってみたい」と思ったら迷うことなくすぐそのまま登ることだ。危険なところはない。風化作用による小石の落下には注意していてほしい。歩くことだ。山道を歩一歩ともの思いながら登る、などは何ものにも代えがたい最高の喜びである。しかも歴史の色濃くしみこんだ道ではないか。

竹田駅うらからの古道は少々きついが、若者向きであり、歴史の小径でもある。比高一五〇メートルぐらいだから上り坂だと言ったところで問題ではない。

もう一本の道は大字竹田の南端・町はずれから、J・Rの線路を越えて舗装された一本道の城山道をまっすぐに行けばよい。中腹には新しく駐車場が完成した。

忘れずにぜひ合掌してほしいのは、駐車場の西がわに、五月末完成予定で

「山名・赤松両軍陣没諸霊供養塔」

が美方郡村岡町・山名寺住職

吉川広昭師

のご奔走で建立される。

山名・赤松の両軍が恩讎を越えてまつられる浄地に手を合わせてほしい。恒久和平こそ万人の願い。供養塔こそ、そのシンボルであるのだ。

城跡にたどりつけば眼下に展開されている景観を時間をかけてゆっくり楽しんでほしい。前方の粟鹿山をながめ直下の町並みを見る。右に左に展望が眼にこころよい。播但線と平行して円山川の清流が北へ流れ「竹田千軒城下町」ともてはやされた人家が建ち並び

歴史を秘めた面影を残している。

竹田城跡の見どころは「石積みの美しさ」にある。穴太流野面積の見事さである。一にも二にも石垣に注意してほしい。しかし、石積み技法が始めから分かるということは無理なはなしで、時間をかけて見ていくうちに、少しずつ分かるようになるものだ。

たとえば、花屋敷と言われている一郭から仰ぐ重畳たる石積みの重厚にして荘重なこと、南千畳に立って一望する石垣の壮大にして変化に富むすばらしい遠望は「石積みの饗宴」とでも言えようか。

三、城の歴史をさぐる

竹田城は、但馬国の守護大名であった山名宗全の家臣で、この土地の土豪であった太田垣氏の居城であると言われている。太田垣氏は但馬生えぬきの国人であったが、一四世紀の中ごろ関東上野国から来た山名氏に臣下の礼をとるようになった。

山名宗全は、一四四三年（嘉吉三年）初代城主として太田垣光景を配し、一五八〇年、（天正八年）羽柴秀吉の但馬攻めで太田垣氏による竹田城支配が終わるまで、景近・宗朝・宗寿・朝廷と五代続き、約一四〇年間の太田垣支配の時代であった。

一五六九年（永禄一二年）八月織田信長は羽柴秀吉に但馬攻略を命じた。但馬十八城はたちまち落城し、守護・祐豊は堺へ身をひそめた。信長は生野鉱山に対し発言権を確保しておきたかったのだ。一五七七年（天正五年）十月秀吉は、毛利氏上洛の行手をとどめるため要衝としての竹田城占拠を必要とし、第二回目の但馬侵攻作戦。十一月岩州城を、ひきつづいて竹田城を攻め落とし異母弟小一郎秀長を城代として入れた。

一五八〇年（天正八年）五月、秀吉は鳥取城を中心とした因幡攻めを敢行する途次、秀長に再び但馬攻略を命じ反信長勢力の一掃をやらせた。山名祐豊の居城であった出石城も（有子山城）落城し、室町時代以後続いた守護山名氏の嫡流はここに終わった。

一五八〇年（天正八年）竹田城主には、秀吉の部下「桑山重晴」が任じられた。治政五年、重晴は和歌山

城主に栄転し後任として今も敬慕されている「赤松広秀―広英とも書く」が最後の城主となった。

広秀は竹田に移住してからも「斑鳩寺」の鵤の太子を厚く信仰している。その境内には、赤松父子供養塔が建てられている。碑文は次のごとくである。

赤松政秀
赤松広英　侯
供養塔

兵庫県知事
金井元彦　書

竜野城主　赤松政秀　文武の誉高く　その子広英亦文雅の才あり　藤原惺窩と善し　朝鮮の役に捕虜となりし大儒姜沆の三人伏見の赤松邸に於て慶長三年九月より一年有半四書五経の訓点刊行を企て戦乱の世にはじめて文芸復興の烽火をあげ但馬竹田で仁政を布き名君として慕われしが関ケ原の戦に石田三成に味方し家康の怒りにふれ慶長五年十月二十八日鳥取真教寺で自刃年三十九

赤松氏は悲しくも断絶した　斑鳩寺の鐘楼は国宝三重塔を創建した父政秀の遺志を襲ぎ竹田より寄進したものである　ここに有縁の士相寄り政秀広英父子の霊を弔いその文化的遺業を永遠に顕彰するためこの碑を建立する

昭和三十八年十月建之
東大教授
文学博士　阿部吉雄
他　七名

（七名の中の一人に、元竹田町長足立荘太郎氏がはいっている。）

竹田城主「赤松広秀」の無二の親友は程朱の学をきわめ、儒学をもって家を成し民間の大儒として名高い「藤原惺窩」である。

惺窩は「赤松氏を悼む和歌三十首」を書きあらわし、広秀の死を悼んでいるが、その書き出しの一節がこうである。

「赤松左兵衛佐広通は、ゆかりあるぬしにてもとよりしたしかりけるが、一とせ世の乱れしとき、亀井の何がし、しこちことによりつみなくて切腹せしが、年比ひめおきし書物など形見にのこして、文いとねんごろに書きおくりけるをみて、

かくばかり　終りただしき筆のあとを
　　みるかひもなく乱れてぞ思ふ

（解釈）赤松左兵衛佐広通は、わたしと縁故の深い人物であり、昔から親しくしていたのだったが、ある年、戦乱の起きた時、亀井の何某という者のざん言にあって、罪もないのに切腹した。

長年秘蔵していた書物などを形見に残し、ねんごな手紙を、わたしのもとに書き送ってきたのを見て、次のように歌をよんだ。

死にのぞんで、とりみだしたようすもない端正な筆跡を見て、せっかくの文字も涙にかきくれてしまうほど、わたしの思いは乱れる。　と。

これによっても広秀がどんな人物であったかが推察されると思う。

広秀は赤松氏の支流ではあるが播州龍野城主・赤松政秀の次男である。

一六〇〇年（慶長五年）九月に「関が原の役」が起きたが、広秀は西軍に属し石田三成方として、丹波の田辺城に東軍「細川幽斉」を攻めた。西軍が敗れるに及んで、広秀の軍は竹田に引き返したが、鳥取城を攻めあぐんでいる亀井滋矩から「鳥取攻めを援助してくれるなら、西軍に組みした罪をゆるしてもらえるよう家康に頼むから」との、亀井の言に動かされて鳥取に出兵し功を立てた。

たまたま鳥取城下は出火によって多くの住民が困窮したが、家康の詰問と亀井のざん言によって罪を一身に負わされ、慶長五年十月二十八日鳥取真教寺において自刃した。年齢三十九歳であった。

鳥取市湯所町「赤松八幡宮」の地に葬られている。

武人としての広秀は、また政治家としても文化人と

しても一流の人士であった。

当時有名な儒者「藤原惺窩」と親交があり、龍野市「景雲寺跡」は両人が青春の血を湧かして勉学に精励した遺跡である。

朝鮮の大儒「姜沆」が、朝鮮の役において藤堂軍に捕われて捕虜となり滞日中、広秀は四書五経について教えをこうていたのであるが、姜沆の日本見聞録とでもいうべき「看羊録」を書いている。

秀吉・家康を始め多くの人物批評など、実に興趣つきない記録といえよう。

また養蚕業を振興し、税の減免をはかるなど民政の面にも努力したことなど、今に語り伝えて深い影響を与えている。

まことに「山名宗全」が着手して播いた竹田城という種子が、直臣太田垣五代によって成長し「赤松広秀」に至って実を結んだという事実は、「恐怖」と「格闘」の中世における一服の清涼剤といえる。

山名・赤松両氏結縁の町づくり

― 観点を変えて考えてみよう

「城と人間」が共存していて訪れる人びとの心をとらえて離さない、そこに住んでいる人たちも「わが町だ」という誇りを持ち「産業の振興」と「文化行政」が一体化していることを願っている、そうした町はないものかということである。

「的」を兵庫県にしぼった。そして二十一世紀をよりよく生きるための町発展の手がかりを見つけたい、そうした考えに基づいて次の一市二町をあげてみた。

それは、「出石町」「篠山町」「龍野市」である。出石此隅城と龍野城とは、竹田虎臥城と深い人間的つながりがあるのも何かの奇縁であるが、この一市二町の共通点を次のように言えないだろうか。

第一はともに「城下町」であること。第二は「鉄

から離れ」ていること。第三は「人物が多く出ている」こと。もう一点は「特色のあるものを持っている」ことである。

城下町として歴史の重みに耐えて今日に至り、わけても、鉄道から離れている事実は、色いろな事情があったにせよ町政推進に当って苦難の多い道のりであったと推察する。今やクルマ時代の到来によって、さほどなことでなくなり、考えようによってはそのマイナスを逆手にとって、今日の実力をもたらしたといえなくもない。この点、大切なポイント。

人物輩出については、出石町には加藤弘之・斉藤隆夫氏などがあり、文教・政治方面に活躍された日本的存在であった。藩主・仙石政辰は一七七五年（安永四年）学問所を「弘道館」と名づけ、学問を奨励した。但馬文化発祥の地である。

篠山町は軍都として栄え本庄繁大将などが出た。龍野市は哲学者として三木清氏、「赤とんぼ」であまりにも有名な三木露風氏などが出ている。

最後の特色あるものとしては、出石町では「出石焼」と「出石そば」篠山町では「ぼたん鍋」に「デカンショ節」そして伝統ある「春日能」龍野市の「醤油」と「そうめん」は今さら説明もいらないだろう。

これらの市町の町づくりで痛感することは、「物と心の調和」のとれた町政を目ざしていることだ。金銭であがなえないものを長年かかって蓄積してきている。質の高い内容ある暮らしこそ町民みんなの願いである。

二十一世紀は「日本海時代」だというが、生野・和田山・八鹿・豊岡は「山名の線」でつなげる。生野を仲介として播磨へ、つまり「赤松の線」で、南北が結縁できる。

それぞれ市・町の個性と伝統を生かした地場産業を発展させ、優良企業を導入して町勢に活力を与え、天与の史跡や自然を生かし、文化活動を盛り上らせた「定住圏構想」の実現を心から期待する次第である。

終わりにひと言。

城址の一木一石には山名・赤松両氏の霊魂がこもっ

ていることを思うとき、顕彰会の初議によって「両軍陣没諸霊供養塔」が建立され、長く慰霊の儀が執行されることは、まことに時宜を得たことと考える。

「徳政相論」という有名な事実がある。国民はいつの場合でも「平和を求め」ている。

こい願わくば「供養塔建立」が「世界平和」への一歩前進の一里塚になりますように。

やまんどさんの小祠

佐治のやまんどさん

中島憲仁

憶えば昨年（平成一年）の第四回総会終了直前のことである。生野大明寺での記念撮影がすんだ時、今は亡き太田垣理事長がこんなことを私に問いかけられた。

「二十年も前のことだが……」と前置きされた話を要約すると、鳥取の山奥に「やまんどさん」と呼ばれる祠（ほこら）があり、そこには、「施主山名時氏」と刻んだ線香台があったそうで、その曰く因縁を、私に調べてくれないかとおっしゃるのである。

私の地元鳥取県内のことではあるが、正直いって私も初耳のことであった。しかし、時氏公の遺物があるとすれば何はさておき調べずばなるまい。翌日現地探訪に同行することを約してこの日は別れた。

時氏公銘の線香たて

翌日、車を駆って、佐治村大井の昌福寺さんを訪ねた。佐治村といえば、流し雛で知られる用瀬（もちがせ）の上流四粁のところで、ここは山奥ながら因州和紙の産地として知られている。

方丈さんの説明によると、この寺はもともと対岸の古市にあったもので、そこの境内に「やまんどさん」が祠られているが、後に火災に会ったので、小祠と五輪塔群を残したまま、寺だけ現在地へ移転したとか。「やまんどさん」や時氏公については、昔の有名な武将を祭ったものというほか格別の伝承もないということであった。

太田垣理事長は、「これは歴史研究部会の中島副会長さんの手で、今すこし説明がつくよう研究してもらいたい」と言い残して和歌山へ帰られたが、これが今生の別れとは知る由もなかった。半年後の十月に急逝されたのである。従って、お約束の調査報告はとうとうお目にかけずに終ってしまった。今この一文を寄せることで、せめてもの約束を果たしたいと思うのであ

る。

時氏公が因伯の守護大名として入赴したのが一三三八年頃と推定されている。世は南北朝の戦い、建武の中興の時代に突入していた。因伯大年表によると、時氏公が入赴して十五年目の「文和八年（一三五三）三月、美作を収む」とあり、当時播州上郡の白旗城主は赤松則村公、美作城主は二男の貞則公で、この時代は隣国境を掠め取り領地拡張を計るための局地戦が各所で展開されていた。

つづいて五月七日に時氏公は五千の兵を以って伯耆を発し、楠正儀・和田正武・赤松氏範等と会い、六月足利義詮と神楽坂で戦いこれを破って還っている。赤松氏とは三月の戦いで和睦ができたものか。

○延元二年丙申赤松世貞赤松則祐因州ニ攻メ入リ智頭郡草木操尾景石城ヲ抜ク（太平記）

赤松勢はこれらの三城を攻めて味方につけ、その勢いで佐治但馬守領に攻め入った。伯耆の山名時氏は自ら軍を率いて但馬守に援軍して赤松勢を敗走せしめた。佐治侵攻のこの戦いで討死した山名氏の若武者をはじめ、部下の将兵を葬ったのが、この「佐治の山名人（やまんど）さん」であろう。

この古市の地から佐治川を西に遡れば辰巳峠つづいて人形峠、越えれば三朝を経て倉吉（時氏公の本拠）へ至る。つまり上郡の赤松氏と倉吉の山名氏を結ぶ最短路線上にあるのがこの佐治谷で、今では山中の忘れられたような山村であるが、往時には南北二大勢力の狭間で時代の激流に晒されたことを思えば、「やまんどさん」と五輪塔群にひとしおの感懐が湧くのである。

そのほかに山名・赤松両氏の交渉は次のようである。

○一三六二年六月時氏兵ヲ美作院庄に勤シ兵ヲ分チテ備前備中ヲ従ヘ高師秀潰ヘ走ル、富田直貞ヲシテ備後ヲ略セシム（大日本史）

○一三六四年山名時氏、仁木義長反ス、時氏因幡・伯耆・美作・丹波・丹後ノ守護職ト為ル、時氏乃チ山名義理ヲ作州ノ守護代ト為ス（美作略史）

○一三六五年時氏但馬ノ拠点トシテ出石此隅城ヲ

築城シ時義ヲ差置ク。

○一三七一年四月二八日時氏歿ス、伯州桑郡三明寺村ニ葬ス、光孝寺殿鎮国道静大禅定門ト号ス。

○一三七四年三月足利義満西侵ス、大名三十九人、兵凡ソ十萬、山名赤松之レガ先鋒タリ（国史略）

以上、「佐治のやまんどさん」をよりどころとして、山名赤松両氏の交渉のあとをなぞってみた。はたして、太田垣理事長の付託にこたえることができただろうか。ともあれご冥福を祈るものである。

五輪塔群１

五輪塔群 2

有感 山名赤松和解式

萩原初治

想えば家祖赤松円心公が後醍醐天皇建武中興の鴻業に参加、其の功績は史上炳乎として光輝く所であり、足利政権樹立に果した役割も同族の自負するものである。将軍足利義教公の強圧に抗し弑逆した所謂嘉吉の変後天正に至る百余年に亘る山名赤松両族の播但各地に於ける壮烈な攻防戦が繰り拡げられた。吾人の家祖赤松彦五郎則尚は文安元年（一四四四）四月赤松満政と共に播磨の奪回を企てたが事ならず、同族持家公の討つ所となり（東寺執行日記文安二年四月四日）、赤松播磨守父子一族郎党百二十四人の頸は高辻河原に懸けられたとは記録の止める所である。

家祖則尚は転々居を替え各地を潜行、赤松元家による足利義政公への宥免も許容されたが、山名持豊公細川公の経緯もあり播磨に下向して一族を集め鵤（いかるが）の檀特山に籠り一手は山名政豊の室山城に立ち向った。戦は閏四月二十七日に始まったが、五月になると山名持豊と教豊に率いられた軍勢が大挙但馬から播磨に進攻してきた。書写山坂本城に拠った則尚は北の大軍に抗すべきすべもなく海路備前大島郡鹿久居島（岡山県日生町）に逃れたが、四方を扼され一族郎党二十二人と共に自刃し、五月十三日に法雲寺に於て持豊公により頸実検が行れた。思へば嘉吉の変後最後の抵抗者則尚公のこの終焉は痛恨極りなきことである。

本土と鹿久居島とは一衣帯水の日生町に居住する筆者は康正元年四百五十有余年の昔を偲び一詩を賦奠し菩堤を弔った次第である。

吊家祖赤松則尚公　家祖赤松則尚公を弔らう

鬼哭啾啾萬恨長　鬼哭啾啾萬恨長し

康正享徳夢茫茫　康正享徳の夢は茫茫たり

赤松則尚自裁跡　赤松則尚の自裁の跡

往事追懐獨断腸　往事追懐して獨り断腸

恰もよし平成元年四月二十三日、星霜五百四十余年を経て山名、赤松両軍子孫による和解供養慰霊祭の奉修といい、平成二年五月吉日両族末葉による供養塔の建立といい、往事を想起して喜びは限りないものがある。拙ない歌を献じ菩提を弔うものである。

現世（うつしよ）に刃の下に争へど
共に語らん蓮の台（うてな）で

想えば嘉吉の変より天正年間一百有余年山名赤松一族の興亡を賭して修羅の巷にまみえた戦士は死なば皆仏子、浄土の蓮華台上であの日あの時あのことがらを語りあって末孫の和解供養を享受されるであろうと願望するものである。

合掌

赤松軍と山名軍の合戦史

宮田靖國

赤松軍と山名軍が対立した嗚矢は、おそらく観応の擾乱（一三五〇～五二年）で、足利尊氏と弟直義が間隙を生じ、直義が鎌倉で毒殺された後であろう。しかし、この時赤松軍と山名軍が干戈を交えた記録はない。故に、最初の合戦は、「太平記」の第三十二巻に見える神南合戦（一三五五年）である。神南は山崎の西、桜井駅の南にある。引用すると、

「一陣二陣忽に攻破られて、山名彌勝に乗じければ、峰々に磬たる国々の軍勢共、未だ戦わざる先に捨鞭を打て落行きける程に、大将羽林公（注、足利義詮）の陣の辺には僅に勢百騎計ぞ残げる。是までも猶佐々木判官入道道誉、赤松律師則祐二人、少も気を屈せず、敷皮の上に居直りて、『何くへか一足も引き候べき。只我等が討死仕りて候はんずるを御覧ぜられて後、御自害候へ』と、大将をおきて奉りて、彌勇みてぞ見えたりける。大将の陣無勢に成て、而も四目結の旗一流有と見へければ、山名大に悦て申しけるは、『抑我此の乱を起す事、天下を傾け将軍を滅し奉らんと思うに非ず、只道誉が我に無礼なりし振舞を憎しと思う許也。此に四目結の旗は道誉にてぞ有らん。是天の与たる処の幸也。自余の敵に目な懸そ。あの頸取て我に見せよ』と歯嚙みして前まれければ、六千余騎の兵共、我先にと勇み前んで大将の陣へ打て懸る。敵の近事二町許に成にければ、赤松律師則祐、帷幕を颯と打挙げて、『天下の勝負此軍に非ずや。何の為にか命を惜むべき。名将の御前にて紛れもなく討死して、後記に留めよや』

と下知しければ、云々」

と、あって、両軍、ここを先途と戦い、血河屍山を築くのである。しかし、この文面から明らかな如く、お互いの遺恨によって戦ったのではなく、山名は南軍の一翼を担い、赤松は足利義詮を守らんとしただけの事である。ここに登場する山名は時氏の嫡男師義の事で、彼はこの戦いで、左の眼を小耳の根へ射付けられ、自害せんとした処を、河村弾正が馳寄って、おのが馬に掻乗せて逃がし、自らは殿となって切り死にした。

かくて、神南合戦に山名は一敗地にまみれた。ついで赤松氏との合戦は、美作国で起った。時に康安元年（一三六一年）であった。

「太平記」第三十六巻には、

「斯る処に、七月十二日山名伊豆守時氏、嫡子右衛門佐師義、次男中務大輔、出雲、伯耆、因幡、三ケ國の勢三千余騎を卒して美作へ発向す。云々」に始まり、「赤松筑前入道世貞、舎弟律師則祐、其弟弾正少弼氏範、大夫判官光範、宮内少輔師範、掃部助直頼、筑前五郎顕範、佐用、上月、真嶋、柏原の一族相集て二千余騎、高倉山の麓に陣を取て、敵倉懸の城を攻めなば弊に乗じて後攻をせんと企つと聞えければ、山名右衛門佐師義、勝れたる兵八百余騎を卒して、敵の近付んと所へ懸合せんと、浮勢になりて引えたり。――中略――去程に倉懸の城には人多くして兵粮少なかりければ、戦う度に軍利有りといへども、後攻の憑もなく、食盡矢種盡きければ、力なく十一月四日遂に城を落ちにけり。是より、山名山陰道四箇國を并せて勢彌近國に振うのみに非ず、諸國の聞え、おびただしかりければ、世の中如何あらんと危く思わぬ人も無かりけり。」

と、あって、山名の勝利に終った。

つぎの合戦は明徳二（一三九一）年十二月三十日の明徳の乱である。「明徳記」から、

「赤松上総介義則一千三百余騎。二條猪熊、松文字書きたる大旗を真前に進めて申けるは、今朝の合戦は大内勢手を砕ぬ。当手の兵荒勢にて合力の為に馳向べき由仰下されつる上は他人の軍を待つべからず、先一

番勢い懸入て、命を捨る軍とて旗を二條より南へ進て、くつばみを竝て待懸たり。山名中務大輔（注、氏家）五百余騎、早々猪熊を上に押寄て、赤松勢の真中へ、エイ聲を揚て切って入て、三引両の大旗、松文字書たる赤松旗と合つ別つ廻り逢い、破り破れつ入乱れて五六度が程揉合て勝負未だ見えざる処に、奥州（注、山名陸奥守氏清）の兵五百余騎、押小路より二條猪熊へ筋変えざまに懸入て、息もつかせず揉ければ、人馬彌が上に死重て、血は涿鹿の河となりて紅波楯を流せば、屍は屠所の肉を積り、白刃骨を砕く。むざんと云もおろか也。されば上総介の兵は舎弟左馬助を始めとして、佐用、柏原、宇野、上村、櫛橋、宗徒の兵五十七人討れにけり。上総介の旗差も大勢の中に懸入て、旗をば竿に取添て散々に切て廻りけるが、奥州の旗差に馳合て是非なくムズと引組で、差違て二人の者同枕に死にけり。前代未聞の風情也。山名奥州、中務大輔両人の兵共入替〳〵揉ける間、上総介の兵は戦屈してあらけ立て、二条を東へ、猪熊を北へなだれ引たりける。——中略——かかりける処に、赤松の上総介義則は一足も退ぞかず、二条猪熊岩神の前に磬えつつ、返せいずくへ引ぞ。此陣を破られて後日、人に嘲られんば義則が不覚にて有べし。義則においては討死するぞ。左様に契らん人々よ、返せ〳〵と呼ければ、有野、喜多野、浦上を先として此彼より馳寄て、主従七騎轡を竝て敵重て押懸なば、互に手を取組で討死すべしと云盛に、思定て待懸たり。さこそ赤松上総介の兵は山名勢に打負て、引たりけるとは沙汰ありしかども、二条猪熊の破られずして、一旦引し兵共も又本陣へ馳集て、終に軍に勝ぬと天下に流布はしたりけれ。」

と、あるから、まあ、引分けと言う処か。

次は悲劇の嘉吉の乱（一四四一）である。周知の事なれば、簡単に「嘉吉記」から、

「赤松は定て諸大名寄せ来らん、一合戦して腹を切らんと待けれども、門外に人音もせず。播磨へ下り、城山白旛の城を拵て、討手の下向を待つ可しと、酉刻より油小路を出て真直に東寺へかかり、路次に手さす

者もなく、播磨へ下着しけり、都には軍評定あって、播州討手の手分を定らる。大手は細川讃岐守成之。赤松伊豆守貞村。武田大膳大夫信繁也。搦手は山名右衛門督持豊。同修理大夫凞高。同相摸守也。金吾人に勝て大功を立てんと願人也。其心操驪龍頷下の玉をも奪はんほどの機分なれば、なじかは少も猶豫すべき。大山口より國中へ切て入る。城の向い西福寺の上にはしさき河を隔て陣を取る。修理大夫、相模守、因幡伯耆勢を率し、搦手へ廻りければ、金吾河を渡し、城山の麓に陣を取る。十重廿重に取巻き、日夜息をも継ず攻入。壁櫓引破り城中あばらに見透し、其上兵粮も盡ければ、九月十日大膳大夫満祐入道性具自害しぬ。城中兵人に知られるほどの者は腹を切る其数を知らず。子息彦次郎教祐いつのまにか逐電しけん。あと知らずに成けり。云々。」

これを「嘉吉物語」で補足すると、

「扨も赤松殿は、御曹子のおち給いし時、その御うしろかげを見をくりて、しばしはたたずみ給いしかども、ついに大勢の中へまぎれ入り給えば、さすが親子のわかれをかなしみつつ、御袖をかおにおしあてて、なみだにむせび給いけり。そののち安積をめされて、城のうちの体は、いかように有ぞととい給えば、あづみ申すよう、城中には御勢もなく候。いまは御はらめされ候べしと申ければ、入道殿さては心得たりとて、先東にむきて手をあわせ、伊勢天照大神へ御いとまごいを申されけり。さて又やわた山のかたを礼し給いて、南無八幡大菩薩、入道にただ今腹をきりすませ給えと、きせいをなし、又西にむかいて、南無や西方極楽世界の弥陀修覚、われらたとい極重の悪人なりとも、弥陀は超世のちかいおわしませば、かならず我等を安養世界にむかえさせ給えと、たなごころをあわせて、ふかくきせいをなし、御とし六十一と申すには、ついに御腹をめされけり。むねとの御一門六十九人、おなじ座敷に、安積は此人々のしがいどもを、とりひそめてのち、城中に火をかけて、腹をきらんとしたりしが、何とかおもいけん。こざくらおとしのよろいをきて、お

なじ毛の五まい甲の緒をしめ、八尺あまりのしらえの長刀つえにつき、南むきの勢楼にあがり、大音あげて申すよう。是は赤松殿の御内に安積と申して、かたじけなくも、普広院どのの御首をたまわりたるものにして候が、今まで命ながらえて、度々の合戦に、敵に後ろをみせず、高名仕り候也。よせ手の中に、大剛のつわもの我とおもわん人あらば、いざやよせ合え、勝負を決せん。高らかに名乗りければ、山名修理大夫殿の御内、村の助影安といえる兵、五人ばかりの弓に、矢をつがいて進み出で、安積殿のあまりに人もなげにのしり給うに、ほそやづかにて侍れども、矢一すじまいらせんとて、十三そく三ふせよつひき兵と放ちけり。安積がもちたるなぎなたの石つきの上、三寸ばかりを射とおして、あまる矢か、矢倉の防ぎ板に篦中すぎてぞいたてける。安積こころにおもうよう、いや〳〵かようの者に、矢一筋にて射殺されん事は、口惜しき事なるべしとて、矢ぐらより下にとんでおり、大勢の中へわって入り、件の影安をめにかけて、おめきさけんできってまわる。本より安積は一騎当千の兵なれば、四かく八ぽう、八はなかた十文字にきりまわり、きって落す程に、手にたつ者ぞなかりけり。やにわに敵十三騎斬って落しけり。去程に影安、いせんあたや射つる事を無念におもいければ、安積なればとて、鬼神にてもあらじと、馬より下にとんでおり、安積殿いざやくまんとて、六尺あまりの大たちを、まっこうにさしかざしかかりけり。安積にっこりとわらい、我等もさこそ存ずれば、いざや勝負をすべしとて、件の大なぎなたを小わきにかいこんで、おどりかかる。影安も大たちにて互いに剛の兵なれば、半時ばかり戦いしが、さらに勝負はみえざりけり。安積心におもうよう。いぜん影安がいたりし矢に当りなば、さこそ口惜かるべきを、かくてわたり合たる事のうれしさよと、よろこびつつ、大長刀をくきなかにとりのえて、まっこうを丁とうちければ、影安が運命のきわめにてやありけん。きっさきほそ首に当りて、廿七歳と申すには、安積が手にかかりてうたれけり。弟の平三影光、兄をうたせ

て口惜しく思いければ、安積にきってかかる。安積にっことわらい、あらやさしの影光や、侍のならいとて、兄をうたせ、身をすてんとおもう心ざしこそあわれなれ。さりながら、手にたるまじき事のむざんよ。おなじくは命をながらえて、兄の後生をとむらい給えかしといいければ、いよ〳〵影光はらをたて、怒りをなしてかかりけるを、なさけなくも安積殿、長うち物をすてざまに、とって引きよせ、わたかみつかんで、ひだりのわきにかいこんで、しや頸ねじきりすててけり。是をみてみな〳〵かなわじとやおもいけん、城のふもとまで引きしりぞきけり。さる程に、安積は本の城にかえりて、御かたの勢をあつめけるに、わずかに百人にもたらず、うちなされけり。安積此うえはみな〳〵おもい〳〵におち行きて、世をすごし給うべし。我々事は、入道殿のさだめで死出の山三途の川にてまち給えければ、急ぎおいつき奉るべしとて、入道殿の御しがいにとりつきて、南海や西方極楽世界の弥陀善逝、すでに我等ははかい無慚の凡夫なれば、かねて後生の善をいとなむ事なし。其うえ弓矢の家に生まれぬれば、いつも殺生をのみ事とせり。かなしきかなや。さりながら弥陀方便の御ちかいをあおぎ奉れば、摂取不捨の本誓、不取正覚の悲願、たのもしきかな、たとい極悪人也とも、せいぐむなしからずんば、罪障のまよいの雲をふきはらって、真如の月の影をやどし給えつつ、ちかくはふたらく山の大悲観音、とおくは西方極楽世界の弥陀如来、われらをむかえ給えと、ねんがんしてのち、抑赤松殿の御内に、安積とて度々の合戦に、高名したる兵の、ただ今腹をきるをみおきて、心あらん侍者のちの手本にせよというもあえず、腹十文字にかききり、腹わたをつかみ出し、矢ぐらの下へなげ落しけり。しかれども、大剛のものなれば、いまだ死なず。又本の城へかえり、入道殿の御座ありし所に火をかけ、入道殿の御跡をまくらとして、みずからとどめをさして、やけ死にけり。」

かくて、持豊は播磨国を、修理大夫は美作国を、相模守は備前国を拝領した。しかし、享徳三年、細川成

之は赤松彦次郎祐之、彦五郎を取りなし、将軍義政は内々赦免した。かくて、翌享徳四（一四五五）年四月、「赤松彦次郎祐之、同彦五郎則尚、播磨へ打入、国人を語らい二手に分ち、一手は檀特山を保ち国中を打随へんとし、一手は室山に持豊が子息弾正忠政豊楯籠りけるを、彦次郎彦五郎水火になって攻落さんとす。持豊これを聞て、五月の初播磨に往て普當山に陣を取り、檀特山に楯籠りける敵を一責せめけれども落し得ざれば、ここを打捨て坂本へ通る。其心室山に子息弾正忠政豊籠しを彦次郎急に攻て難儀の由を聞て、敵を跡におきながら坂本へ被通ける。室山の寄手、持豊が威風におそれ、賣口を引退き持豊と戦はんとせしが、引立たるくせなれば、我先にと引退けども、持豊に向て一戦を遂んと思う者はなかりけり。持豊は両敵の間にはさまれば、手痛き合戦あらんと思ひしに、案に相違して敵散々に成り落行けば、却て残多くぞ思ける。室山の寄手くずれたる由を檀特山に籠る軍兵共聞て、我先にと退散して、国中に敵一人もなし。彦五郎は備前のカクイ嶋にて自害し、彦次郎は伊勢国司北畠殿親しきゆえあれば、頼み下りけれども叶ず、自害しけり。」

しかし、この抗争は応仁の乱の一因にもなり、決着は乱中に一まずついたかに見えたが、乱後にも一波乱あるのである。まずは「応仁別記」から。応仁の乱は五月廿六日に始ったが、山名と赤松の合戦は、

「同六月八日一条大宮猪熊の間にて、山名相摸守ひかえたりけるに、赤松次郎政則懸合て数刻合戦有。赤松側には浦上、小寺を始めとして爰を詮と戦けり。中にも依藤豊後守弓手の臉を射られ、其矢折かけて相摸守一門常陸守と組で、上に成り下に成しが、常陸守を取て押え、頸カキ切、太刃の先に貫き、山名常陸守をば依藤豊後守討取ったりと高聲に名乗ける。古の鎌倉権五郎景正にも劣らぬ高名哉とぞ各褒美せられける。相摸守の内片山備前守は大力也。明右越前守是又力量の者也。引組で上に成下に成しが、明石組勝て片山が頸を取て立挙る処に、片山が傍輩赤松孫四郎押並て組処を、明石事ともせず組伏せ、是も頸を取る。惣じて

此合戦に相摸守一族若党廿八人討死す。」

その後、赤松氏は播磨へ下った。山名の家人被官は上洛して留守であるから、赤松は無人の野を征くが如く播磨と備前を席巻した。

「さても美作國事。山名掃部頭ふまえて有しかども、大内新介同道致すべき由申さるる間、打連れて上洛し玉ふ。又、赤松内に中村五郎左衛門尉と云者纔になりしが、大功上に立ん事を朝暮希う者なれば、傍輩ども十人計相語て、同（注、応仁元年）十月三日切て入。院の庄をふまえ、数度大略利を得しかども、東郡へ敵出て、妙見の城、菩提寺、和介山等に籠しかば、政則一名字に広岡民部少輔祐貴に人勢を相添て差下す。三箇年の間合戦止む時なし。去乍ら、太田は山城の柏の城にて討死し、掃部頭又病死しける。其子彦房も盡期山の合戦に打負て伯耆國へ落行けり。粟井加賀、松原弾正、和介山にて討死す。中村が所々にて合戦華に盡し難し。是より後は赤松三ケ国手に入れける。」

と、ある。さて、応仁の乱終って後、山名政豊は播磨、美作、備前を取られたことを無念至極と思い、奪還せんものと兵を動かした。かくて、播但街道は軍馬往来が頻繁になってきた。「借前文明乱記」から、

「山名右衛門督政豊、三ケ国を召放され、赤松に返し被下事を怒り、野心を起し、文明十年九月上旬、上意を伺わず但馬国へ馳下り、軍勢を集る間、赤松兵部少輔も同十月廿一日播磨国へ下向し、此次てを以て備前国松田将監が押領する在所どもを改易すべきの由風風す。元成此事を伝え聞て、――中略――歩行粧にて備後国に下り、山名又次郎俊豊に申けるは、御分国とも今度一乱中、赤松に返し給こと是非無き次第に候、所詮急度思召立、御取返しあるに於ては、備前国のことは我等切開き、可進の由事ものなげに申間、俊豊も元来備前国は望也。一往の思案にも及ばず、頓て領掌あり、軍の内談も申合せて、松田をば備前国にぞ返しける。案の如く、幾程もなく政則備前に打越、彼在々所々を悉押置、給人を付たり。兼てより思儲しことなれば、但馬、備後両国へ飛脚の往還する程こそあれ、

文明十五年九月廿六日に、山名又次郎俊豊、備後の尾道を打立、同國の國分寺に着陣し、分国他国の勢を相催す間、俊豊催促に随う輩には、先ず当国守護代太田垣美作入道。舎弟三河守。同新右衛門尉、同右京亮、三吉太郎、同和泉守。杉原三郎、木梨遠江守、本郷藤左衛門、山内新左衛門尉、同下野守。多賀新兵衛尉。滑良兵庫助。即同四郎太郎。三河内河内守。金谷山城守。花栗播磨守。湯川備中守。鍛冶屋五郎左衛門。和気筑前守。安田掃部頭、小越弾正左衛門。由谷加賀守。江田新蔵人。同與三左衛門尉。湧喜上野介。敷名備中守。下見三郎。栗原刑部左衛門尉。吉原藤左衛門尉。田尻左馬允。上之山出雲守。板倉新左衛門。安芸国には小早川。草井和泉守。竹原則光。備中国には毛利太郎。赤川和泉守。出雲国には馬木惣兵衛尉。伯耆国には小鴨次郎四郎。同掃部助。石見国には周布、福屋、其外隣国の諸侍ども馳付ける程に、都合其勢三千余騎。十一月七日に備前国に押寄る。――――中　略――

斯て山名又次郎俊豊、備前国着陣の日より、但馬國におわする親父右衛門督の方へ、飛脚を立てらるること敷波なり。既に敵と対陣仕り、日々及合戦候。急度其國より播州へ御勢を可被指向、御延引あらば定て播磨美作の勢牒し合せなば、爰元難儀たるべき由被申けれども、上意ならざるに依て、垣屋平右衛門雑掌にて歎き申されければ、未但馬丸山城に磐、播磨國へは不打入給。赤松兵部少輔政則が方へは、――中略――日の中に二三度まで注進しけれども、可然功者なんどもなきか、又は若武者楚忽の義あらんと思いけるか。毎々政則には披露なく、只心得たると云儀の返事ばかりにて、一日路二日路の間に、二ケ国の大勢摑へながら、去年六七月より思儲けたる合戦、翌年正月下旬まで一時も馳加らざりしは、是非なき次第かなとつぶやく人も多かりけり。斯て如何なる者の異見にてか有けん。備前へは宇野下野守、浦上掃部助を指下し、政則は十二月十六日、姫路の城を打立て、同十八日同国大賀庄と云所に着陣す。人皆仰天して、大敵備前に乱入の由、日々注進あるを聞て、如何なる事やらんと申す

に、是は上意ならず、山名又次郎俊豊、備前国に乱入の上は、本知行但馬国朝来郡を打取べしと云儀とぞ聞きける。去程に但馬より打入べき由兼て聞えしかば、赤松伊豆孫次郎大将にて両国の境に真弓峠と云所を堀切、屏を付なんとして拵えける処に、赤松前の勢、真島、上月、宇野、柏原大将にて、一千五百余騎指遣す間、真弓峠に打上りて見れば、雪枯木を埋めて、谷も嶺も分らね程也ければ、寒気を防がんとて、或は風陰日面や、或は麓の水便を尋ねなんとして、陣屋を打居たる処に、十二月廿五日未明に、雪なれたる但馬勢、案内者を先に立て、垣屏越前守大将にて、二千余騎思いよらざる山かげより押寄す。時の声を噇と作る間、赤松勢取ものも取敢えず、支防ぎ戦うと云えども、足だまりもなき嶮岨なる山に、大雪は降積りたり。人馬の通路もあらじと油断しける間、各侍、長良、本郷、柏原、上原左京亮、同神兵衛、布施弾正忠、松田弾正左衛門なんど宗徒の者三十四人、惣じて三百余人討れて、真弓峠は破れにけり。政則此由を聞て、無念の次第也。敵陣に取向て、油断するは未練の至也と大に怒、時刻を移さず馳向う。一合戦すべしとて、大賀の陣を立て、節所の岩の懸道を伝い行程に、具足武者の事なれば、急んとすれど行やらで、夜に入ける間、兎ある谷底に陣屋を居たる所に、小倉少四郎申けるは、此谷合に御磬候はんに、敵山のかさより寄来らば、只以前の二舞なるべし。是にて御合戦なられ損じなば、姫路の城何曲候べき。只御引退有て敵勝に乗候とも、何の子細か候べき。其上雪馴れざる者とも、案内知らずの深山なればこそ、人馬の通路たやすからず候へ。国中の広みへ敵を放出し、要害に引縣て合戦し給ふに於ては、一定味方打勝候はん者をと、心底を盡し教練しければ、政則も最もと同意し、さらば打立べしとて、夜半許に陣屋を立ち取除べし、某は先陣に打、誰は殿せよなんどと云付たる者、いとど先陣に馳抜けて、馬物具を捨て、散々に成ければ、政則僅の兵勢にて、姫路の城にぞ籠られける。」

と、あって播但の戦いは終ったが、備前国吉井川に

ある川中島の福岡城では、十重二十重と取り囲んだ山名勢が、十一月二十二日、十二月十三日、同月二十五日、明けて文明十六年一月一日、二日、六日と総攻撃を敢行し、激戦を展開した。そのあり様を引用する。

「加様に爰を先途と戦えども、山名は彌跡より続きて、引かば残る味方一騎もなかりければ、いとど難儀に見えし処に、浦上与三左衛門、子息与三手勢三百ばかりにて、大勢の中に切て入る。黒煙を立てて攻め戦い、互に勇み進んで数刻揉合ければ、組んで落ち、首を取るもあり、取らるるもあり、親は子を捨て、子は親を助けず。手負い死人を踏み越え踏み越え、命を限りに戦えば、屍は原上の塚に積り、血は則河となって紅波漲り落る有様、無慙と云もおろかなり。伝え聞く、保元平治の合戦。寿永元暦の戦いも、元弘建武の戦闘も、此程けわしき軍はあるべからず。たとえば漢の魯陽鉾を取りて日を招き返せし合戦も、斯ばかりにやと思いやらるゝ計りなり。懸りける処に、松田勢と覚しくて、河原面より楯の端をたゝきて鬨を作り、號叫て懸りける。是を見て浦上紀三郎、唯今討死して各の見参に入るべしと云捨て、無二無三に切て出る。然る所に、浦上伯耆守是を見て、紀三郎が鎧の袖を無手と取て申けるは、合戦これにかぎるべからず、楚忽の討死豈大将の本とせん。大に無益なりと堅く制して出さざりければ、紀三郎も力及ばず止る処に、則國が郎等に内山弥五郎下山弾正と云て、精兵の誉れを取し者あり、此二人紀三郎が前に出て申しけるは、松田惣右衛門尉と矢記書て、最前より味方の兵数多亡命仕る事、無念に存じ候。只今相近に見え候間、一矢仕て見んとて、内山、下山、二人ともに、一枚楯の影より、指詰引詰散々に射る。敵人多く射伏て、弓勢を顕わせり。懸る処に、惣右衛門尉親秀此を見、にくき奴ばらが荒言哉。いで手並の程を見せんとて、中指取て打番い、ヨッ引いてヒャウと放つ。此矢あやまたず下山弾正が胸板にグサと中り、押付て矢尻の出る程に見えければ、動と斃て一言を吐ず死にけり。内山弥五郎惣右衛門射る弓にて、射向の袖を脇引外へ縫様に通ければ、二の矢に

て内山を射る。草摺の胴付をヅバと通しければ、漸取除けるが、幾程無くぞ死したりける。あまりに合戦に屈し、気を疲しければ、相曳に引退きける。云々」とあるが結局、赤松勢は福岡城を開城し、備前を去った。以下の戦いを、石田松蔵著「但馬史」から抜粋すると

「その後赤松政則と浦上則宗が対立し、その内訌の間に、山名政豊は播磨、備前、美作の大半を占領してしまった。

ところが、やがて赤松と浦上は和解して、文明十六年（一四八四）十月、赤松政則は播州へ下り、翌十七年から奪還作戦に着手した。閏三月二十八日、山名政豊の部将、垣屋越前守、同平右衛門尉、その他三百五十人が討死をし、播磨蔭木城を奪取された。

この蔭木城の戦いに、赤松は六千、山名は三万の大軍であった。圧倒的な大軍にもかかわらず山名が敗けたのは、布陣を誤り、山名政豊は遠く離れた書写坂本城にいて、援軍を出す術がなかったからである。」

と、ある。つづいて、

翌十八年正月六日の英賀の戦いには、垣屋越中宅、同孫右衛門以下数十人が討死し、勢いに乗った赤松政則は山名政豊の本城坂本城を攻めた。支城もつぎつぎに攻め落され、ついに長享二年（一四八八）七月、政豊は播磨放棄を決意した。撤退は悲惨であった。赤松勢はひたすら退却する山名勢を追尾して、播但国境を突破したが、それ以上深追いはしなかった。

その後、山名政豊の後を継いだ致豊の時代は何事もなかったが、その舎弟誠豊の代に、またもや播磨へ出陣した。それはゲルマン民族がアルプスを越えて、陽光輝く地中海をめざしてイタリアへ侵入するにも似て、見はてぬ夢であった。

播磨では浦上村国と浦上村宗が抗争していた。好機到来と、但馬守護山名誠豊は大永二年（一五二二）十月十七日、長良口より進入し、十月二十二日法花寺に十一月十一日広峯山に陣して瀬戸内近くまで制圧した。しかし、村国は村宗に一時休戦を申し入れて和睦すると、外敵撃攘に立ち上った。即ち赤松義村の子政村が

播磨守護となって置塩城に入り、一致協力して山名誠豊に当たる。かくて城のつぶし合いが続いたが、山名誠豊の出兵命令にもかかわらず、竹田城の太田垣宗朝は出陣せず、兵站線が伸び切って、戦局は日増しに敗色が濃くなった。

翌大永三年（一五二三）十月、書写山にこもる浦上に対し総攻撃を命じたが、結果は多数の戦死者を出して敗退するのやむなきに到った。これが山名の播磨での最後の軍事行動であった。ついに十一月、誠豊は撤退命令を発し、但馬に引き揚げた。これ以後、二度と山名が播磨を侵略することはなかった。否、逆に但馬が赤松の席巻に備えなければならなくなった。

山名誠豊の後嗣祐豊の代はいよいよ戦国に入り、山名氏も御多分に洩れず下剋上となった。生野銀山をめぐって祐豊と竹田城主太田垣朝延は争っていた。

この時、即ち天正元年、龍野城主赤松広秀が来攻し、激しい攻防戦の末、竹田城を奪取したと、中山東華著「天正太平記」に書いてある。しかし、石田松蔵著「但馬史」にも「兵庫県史」にもその事は記されていない。竹田城の最後の城主であったことは事実であるから、それは秀吉が但馬を征服した後、以前から秀吉の部将であった赤松広秀が竹田の守将として封ぜられたのではないかと推察します。

以上で軍記物に出ている両氏の合戦を抜粋しましたが、元来浅学菲才の身で、赤松氏・山名氏の治乱興亡史を叙する事自体汗顔の至りです。赤松氏の事蹟につきましては研究不足でありますので、碩学諸賢の御叱正を仰ぎます。

以上を箇条書きに列挙すると次のようになります。

乱又は合戦名	年月日	場所
神南合戦	（文和四年）	摂津国三島郡（高槻市）神内。淀川をはさんで楠葉の対岸、桜井の南にあたる。
山名師氏	（一三五五）	
対	二月四日	
赤松則祐	（実は六日）	

美作国攻防戦 山名時氏 対 赤松世貞	正平十六年（康安元年）七月十二日から十一月四日	美作国（岡山県北部）倉懸（くらかけの）城（英田郡作東町田殿の辺にあった城）	
明徳の乱 山名氏清 対 赤松義則	元中八年（明徳二年）（一三九一）十二月三十日	京都二条猪熊（二条大路と猪熊（いのくま）小路の交差点（二条城二の丸御殿の裏）	
嘉吉の乱 山名持豊 対 赤松満祐	嘉吉元年（一四四一）八月二十八日から九月十日	大山口・坂本城・木山（きのやま）城（兵庫県揖保郡新宮町平井字亀の山。	
赤松家再興戦 山名持豊 対 赤松則尚	享徳四年（一四五五）閏四月二十七日から五月十三日	播磨国一円。特に室山城（揖保郡御津町室津。備前国鹿久居島	
応仁の乱 山名持豊 対 赤松政則	応仁元年（一四六七）六月から文明五年（一四七三）	山城国、摂津国、播磨国、備前国、美作国。京都市内が一番の激戦地。	
文明の乱 山名政豊 対 赤松政則	文明十五年（一四八三）十一月七日から長享二年（一四八八）七月	播磨国、備前国、美作国。特に播磨国の真弓峠と坂本城（姫路市書写西坂本字構江）	
播磨国攻防戦 山名誠豊（しげとよ） 対 赤松政村	大永二年（一五二二）十月十七日から翌年の十一月迄	播磨国一円。特に書写山（兵庫県姫路市曽左区書写山）	

中世備後国と山名氏

山名年浩

確かに、備後国は中世において山名氏の領国であった。しかし、本稿で明らかにされるように、一族内の複雑な要因によって支配権が変転する様は必ずしも闡明されてきたとは言いがたい。諸資料を整理して、この点をほぐしておくのがここでの目的である。

備後をめぐる山名氏の興亡は大きく三つの時期に区分して考えることが出来る。第一。応仁の乱以前における備後攻略期。第二。応仁の乱における西軍と東軍の対立が備後において激化した時期。第三。乱後の山名一族内の対立から戦国時代の直前までの時期、である。

一、応仁の乱以前における山名氏の備後攻略

遠く文応・文永期（一二六〇～七五）には、「山名権左衛門入道氏正なる者・居りしが、弟備中に殺さる。後氏正が子・備中を討って、再び此の城（御調郡下津の桜山城のことか―筆者）に拠りし」（『姓氏家系大辞典』第三巻、太田亮著、角川書店、昭和三八年）という一文があり、これが備後における山名氏の存在を示す最も古い記述の一つと考えられる。

以後、山名氏が備後における支配の画期をなしたのは（南朝年号）正平一七年（一三六二）の時氏による備後攻略であった。

新田氏から独立した山名時氏の期には――一時、観

応の政変で足利氏との対立期もあったが――、貞治二年（一三六三）足利氏と手を結んで後、但馬・因幡・伯耆・丹波・美作の五国を領有していた。備後が公式に山名氏の領国として認められるのはそれから一六年後の康暦元年（一三七九）時義が守護職に任ぜられた時からである。しかし、募府権力の確立を目ざす足利氏が、時氏の四男氏清とその弟時義の子時熙（時義の後、備後守護職を継承している）を対立させたことは周知のとおりである（いわゆる明徳の乱）。この乱によって、一一年間山名氏の備後支配は休止している。応永二年（一四〇一）時熙が改めて備後守護職に任じられて以後、山名氏の支配は安定した状態が継続していく。

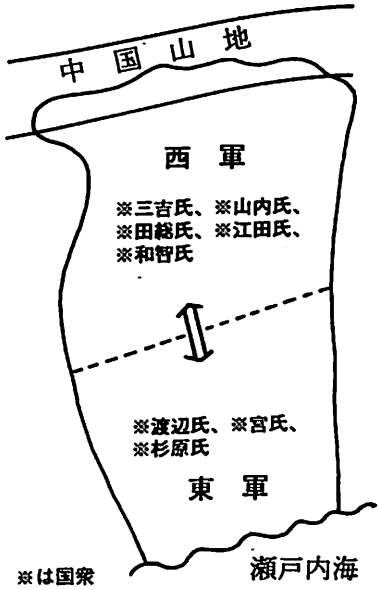
当時、守護所は尾道に置かれ、守護代として現地での責任を受けたのは太田垣一族であった。『備後古城記』には太田垣新六の名が記されている。この期の山名氏の権勢を示す物財としては、時熙の後継持豊の名が残されている尾道の西国寺焔魔堂である。一見に値するこの寺の「再興寄付帳」には、山名教時・山名常勝・山名熙高・山名教之ら一族の名が並び、地元の郷土史家によっても深い関心がもたれている。(1)

時熙の再任から応仁の乱までの六七年間は備後の支配権が強固で安定したものになっていった。しかし後の争乱の条件も形成されている。嘉吉二年（一四四二）持豊が次子是豊を福山の神辺城(2)に派遣したのがそれである。備後を二分した持豊と是豊の父子の争いはこの安定期を終らせていく。

二、応仁の乱と連動した備後の争乱

何故に是豊は父持豊に対立したのであろうか。細川勝元の尽力によって、嘉吉の乱で将軍義政に殉じた山名熙貫（一つに高）の遺跡を継いだことに原因を求める説(3)、熙貫の祖父氏冬は宗家の持豊の祖父時義の兄であることから説明するもの等があるが、いずれにせよ強大化した宗家への反感があったことは時代背景としても解することが出来る。

ともかくも、京での対立は備後にもそのまま持込まれた。西軍の持豊・長子政豊と東軍の是豊という山名一族の対抗関係は左図のように備後の国家を二分する図式として示すことができる。



両軍の形勢は次の三つの事件によって変化していった。一つは、文明二年（一四七〇）守護代宮田教言が庄原の甲山城に入り西軍の態勢を整え東軍を圧迫したこと。二つは、翌文明三年東軍の是豊が京より備後へ戻り、逆に備後を征圧したこと。三つは東軍を側面から援護していた隣国安芸の小早川氏の降伏を契機に是豊側の勢力が衰ていったこと。これらによって、京で応仁の乱の講和がなされた文明六年の翌年、備後でもようやく決着がついた。西軍の勝利により、是豊は中国山地を北上し石見国へ逃れている。

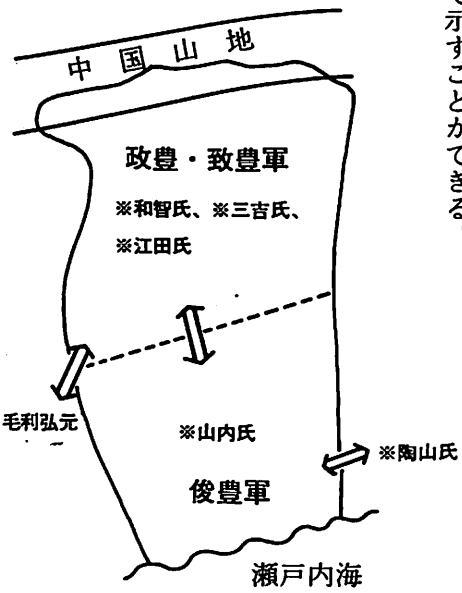
是豊のことについては、『山名家譜』（宮田靖國編著、六甲出版、昭和六二年）では殆んどふれられてはいない。宗家中心の系譜ということからであろう。

乱の終結後、政豊は但馬・備後の二国を支配していった。このころの備後守護代は宮田教言であった。領国二国の立場に置かれた政豊は乱後の文明一五年、嘉吉以来の恩賞の地播磨の奪回をはかったが、失敗し二国の守護はその次子又二郎俊豊に継承された。

三、乱後の山名氏

しかし、一族内の内紛は続発していった。室町時代の基本史料の一とされる相国寺の「蔭涼軒目録」（『仏教全書』所収）によると、明応の政変によって味方を

多く失った俊豊は若狭から但馬に戻り、ここで父政豊・弟致豊との合戦に臨んでいる（明応二～五年）。決着のつかないこの但馬の合戦後、俊豊は備後へ入国したが、これをめぐって再び国家は二分された。明応六～七年頃の庄原を中心とした戦は次のような対抗関係として示すことができる。



この合戦は明応七年の和解によって、但馬は政豊、備後は（俊豊の弟）致豊の支配という形で結末するが、足かけ三〇年を越える一族の内紛によって、山名氏の力量は衰えていった。「文亀二年（一五〇一）大内介義興の攻撃を受けて後は大内方に属し」（『陰徳太平記』）、山名氏はその勢力を維持するのに専らであったという。この期において、山名氏の守護としての実効権力は失われていたとみてよかろう。

下って、天文五年（一五三六）備後福山の神辺城主山名氏明（宮内少輔、従五位）の名が『山名家譜』・『姓氏家系大辞典』等の書物に記載されている。神辺域は南北朝期より山名氏の拠点城であるが、この城主氏明とその子氏政（一つに忠勝）は山名系図からみてその位置が明瞭でない。宗家が防長と大内氏と結んだのに対し、出雲の尼子氏と結んだ氏明・氏政は大内氏の大軍を相手に戦い、天文七年（一五三八）自害している。『山名家譜』には「氏政が郎等藤井能登入道、大江田隼人介は氏政の子を伴ひて因州により、後京に赴く」とある。かっての是豊と同様中国山地を越えたのである。

なお、大内氏側神辺攻めの先鋒であった杉原理興と

いう武将が後に、山名性に改めている。妻が山名家の出自という因縁による（『広島県の歴史』、広島県、昭和四四年、一〇五頁）とされているが系譜を明らかにできる史料は無い。山名理興は西の大内、北の尼子という押し寄せる二つの勢力の狭間にあって苦難の生涯を終えている。

総じて、備後の守護は一本で示すと、時氏―時義―時熙―持豊―政豊―俊豊―致豊という宗家の系統で貫かれている。この点因幡の国の守護の系譜[5]との相違が明らかである[6]。

註

(1) たとえば『備後の武将と山城』（田口義之著、芦田川文庫、昭和六一年）。

(2) 神辺城で南北朝初期に、当時の備後国守護朝山景連によって築かれたものであり、山陽道の拠点であった。

(3) この点では、「山名宗全」（安西篤子著、『下剋上』、集英社、昭和五九年所収）では、是豊と勝豊を混同した部分が含まれている。

(4) 『陰徳太平記』（八一巻四一冊）は元禄年間に毛利氏を中心に書かれた軍記であり、この点の留意が必要であろう。

(5) 因幡の国の守護は次のようになっている。時氏―氏重―氏冬―氏家―熙貞―勝豊―豊時―豊重―豊頼―豊治―誠通―源七郎―豊数。

(6) 宗家系図に記載のない山名姓の人物は歴史上数多い、これらを丹念に整理していく作業は我々の課題の一つである。

山名・赤松両氏の黄昏

事務局　吉川広昭

（はじめに）

この研究ノートに、どなたかが山名赤松両氏の衰運のことを書いてくださるだろうと気楽に構えていたが、面白くないことは書きにくいのだろう。結極誰にもそこまでは触れていただけなかった。編集子の手落ちである。といって今（五月十日）から誰かにお願いすることもご迷惑な話である。やむを得ず。歴史には縁遠い私が受けもって一応の義理を果たすこととした。

なお、私ごとながら、わが家系をたどれば、赤松氏八十八家の中に、先祖円山兵庫頭を見出すことができ、いわば赤松氏末孫のひとりである。それが、山名寺を預かり、朝夕山名氏歴代の菩提を祈るのである。正に宿縁と言うべきだろう。

そんなわけで、盛者必衰を図に描いたような〝山名赤松両氏の黄昏〟を眺めてみた。不備の点はどうかご宥恕いただきたい。

この稿をまとめるために山名赤松両氏の交渉の概略を知ろうと年表（兵庫県史別冊）を繰ってみて、今さらのように無量の感懐を覚えた。

○正平九（一三五四）年　12南党山名時氏、直冬を擁して、但耆より但馬を経て播磨に入り、義詮・則祐軍と斑鳩寺付

近で戦う。

とあるのが山名赤松両氏接触の初見であり、

○大永二(一五二二)年　11但馬守護山店誠豊、赤松家臣の内紛に乗じ播磨に侵入し広峰山に陣をとる。

○大永三(一五二三)年　11山名誠豊、書写山の戦に破れ但馬に退く。

の記述が最後であった。その間実に百七十年、兵庫の南北に対峙した竜虎の両雄は攻防に明け暮れるのである。

中でも抗争が最高潮に達したのは、所謂「嘉吉の変」による両軍の決戦であろうが、それに続く五十年間もまた、両雄の拮抗と、時代の推移による両軍の内部変化ー衰運をもたらせたことで重要である。

○文明　一(一四六九)年　10東軍の山名是豊、赤松政秀ら、大内政広の軍を兵庫に破り、兵庫を奪還する、その戦功により……赤松政則は播磨・備前・美作の三カ国を拝領、兵部少輔に任ぜられる。

○文明　九(一四七七)年　この年赤松政則侍所所司に任ぜられ……

○文明一五(一四八三)年　▽山名政豊、播磨攻略に進発する

9備前の松田元成、浦上則国・櫛橋則伊らの拠る備前福岡城を攻囲する。

12赤松政則、但馬・播磨の国界真弓峠に山名政豊を迎え撃って大敗し、出奔する。

○文明一七(一四八五)年　3赤松政則、播磨光明寺に着陣する、ついで山名政豊の武将垣屋孝知らを播磨蔭木城に攻めて陥れる。

○文明一八(一四八六)年　1赤松政則、山名政豊の兵を播磨英賀に破る。
4赤松政則、山名政豊の兵を播磨坂本に破る。

○長享　一(一四八七)年　3赤松政則、山名政豊の播磨坂本城を陥れる、ついで英賀西・箕見山両城を攻略する。

○長享　二(一四八八)年　4赤松政則ふたたび山名政豊を坂本城に攻めて破る。
7山名政豊、播磨坂本の陣を撤して但馬に引揚げる。赤松政則、追撃してこれを破り、播磨・備前・美作三カ国を回復する。
9但馬守護山名政豊の部将ら政豊を廃し、その子俊豊の擁立をはかる田公某ら政豊を奉じて木崎に拠る。

真弓峠の戦い　嘉吉の変で没落した赤松氏は雌伏三十年後、政則の代に至って播磨・備前・美作の三国を回復した。対する山名氏は、備後の山名俊豊が備前の名門松田氏を語らって、赤松氏の宿老浦上氏が守る備前福岡城を囲み、但馬の父政豊も連繋して播州進攻を図った。

赤松政則は、浦上氏からの救援要請を一先ず措いて但馬勢の機先を制するために北進した。

十二月二十五日未明、雪の真弓峠（朝来郡生野町）に野営していた赤松勢の先陣千五百騎は、山名方の垣屋勢二千余騎の急襲にあって、「宗徒の武将三十四名、総じて三百余人」を失った。政則は姫路に退却するが勢いに押されて国外に逃亡してしまう。浦上氏としては頼み甲斐のない主君政則の振舞に激怒し、政則の廃嫡と慶寿丸の家督相続を将軍家に願い出るという内部

分裂をひきおこした。

この段階では山名政豊が優位に立ち、播磨・備前・美作半国を再び支配下に収めている。

蔭木城の戦い　それから二年後の文明十七年、細川氏の援助を得た赤松政則は、将軍義尚に家督安堵を認めてもらい、体勢を整えて東から播磨に入った。直ちに山名方の守将垣屋一族を蔭木城（東播磨滝野町のちかく？）に囲み、垣屋父子はじめ三百五十余の首をあげるなどの勝利を収めた。かっての真弓峠敗軍の雪辱を果たしたわけである。

この段階を境に、山名氏の勢力は次第におとろえてくる。

英賀・坂本の戦い　翌文明十八年には、英賀（あが）（姫路市西南部）坂本（姫路市北西部）など西播の各所で両軍が戦っているが、赤松軍が徐々に勢いづいてくる。安芸の吉川経基も赤松側に援軍を送るなどで、山名方の結束が破れ、山名政豊の本拠とする坂本城は取ったり取られたりの膠着状態をくりかえしていたが、長享二年ついに政豊は坂本城を捨てて本国但馬に引揚げざるを得なくなった。ために備前福岡城に拠っていた備後の山名勢も撤退を余儀なくされ、美作の山名勢も退去するなどで、赤松氏・浦上氏の勝利が確定した。

両氏の黄昏　文明十五年から長享二年に至る六年間の攻防は、山名・赤松の双方に大きな後遺症を残した。

山名政豊は敗戦帰国の後、国人たちから責任を問われて、山名氏の権威を失墜し、但馬山名氏（惣領家）は衰運にむかって走り出した。

また、赤松氏も同様で、勝利は得たものの宿老浦上氏との軋轢を解消することができず、政則の死後には浦上氏の下剋上化が顕著となって衰退して行く。

こう見てくると、山名・赤松両氏の対立百七十年の

なかで最も深刻な時期がこの六カ年であると言うことができよう。

（本稿を草するに当っては、岡山大学教授石田善人先生の「真弓峠の合戦蔭木城の戦い」―歴史と人物57年4月号―を参考にさせていただいた。明記して御礼申しあげる）

山名氏 赤松氏両軍陣歿諸霊供養塔建立の記

山名
赤松　両氏顕彰会
事務局　吉川広昭

平成二年五月二十六日、但馬竹田虎臥山城頭に、山名赤松両氏顕彰会は一級の室塔を建立しました。

塔の型式は、中世の武将に相応すべく、宝篋印塔とし、範を城崎町の温泉寺塔（国重文指定）に求め、施工を日高町の㈱神鍋石材さんに托しました。

塔内には、往昔山名・赤松両軍の流血の跡である但馬真弓峠・播磨坂本城・室山城・城山城等の土砂一瓶と、山名・赤松両氏の末裔が今日を記念して至心に浄写した「宝篋印陀羅尼経を納めております。

顧みれば、嘉吉の変を頂点とした永年の間、播但の南北に対峙した竜虎の両雄は京都兵庫岡山等の各地で壮烈な攻防戦を展開してきました。戦国の習いとは言え痛恨の極みであります。これら幾百千の陣歿諸霊の鎮魂供養と、史上に雄名を止めた両氏の遺徳顕彰は、今日に生きる末裔等しく為さねばならない責務でもあります。

以下、供養塔建立の経緯を要約して事業報告といたします。

㈠発願者太田垣泰明氏と発起人会発足

平成二年正月、和歌山市在住の太田垣泰明氏から、宿願の両軍諸霊供養塔建立を進めるために多額の運動費が寄托されました。

氏は村岡山名氏第七代義徳公を祖として、中世の名門太田垣氏を復興襲名された家系の方ですから、竹田城将として五代に亘って南但馬を支配した「太田垣氏」とは血縁的には無関係ですが、名跡を嗣いだからには、これ（供養塔建立）をやらなければご先祖に対して申訳がないという使命観を持っておられました。氏はまた、全国山名氏一族会の理事長でもありました。

そのご熱意に触発されて、事務局側も実動にふみきりました。同年四月の第四回全国山名氏一族会総会に提案議決したのは当然ですが、赤松氏側の各位への呼びかけといいますかご相談といいますか、ご同調ねがえるお方を摸索する毎日が続きました。この間に赤松氏菩提寺の播州赤松法雲寺様・赤松史研究の第一人者であられる竜野市八瀬孝先生の親身なお世話をいただいたことが何よりの励みとなりました。

かくして、十一月の末には赤松氏側二十氏山名氏側二十名で「供養塔建立発起人会」を発足させる運びとなりました。

そうした十月十一日、突如として発願者太田垣泰明氏急逝という悲報が届きました。続いてご遺族から、故人の遺志として、供養塔建立資金にと多額のご寄進がございました。悲喜交々の感懐を胸に、私どもは初志貫徹こそ唯一の報恩供養であることを誓い合ったものです。

十一月二十六日、大阪の新阪急ホテルで、所期の通り発起人会を開催し、全会一致で建立に向かうことが約され、またそれぞれの同族や知己をご紹介くださるという心強いご支援をいただくことができました。

(二)和田山町有志のご協力

一方、供養塔建立に当っての用地確保ですが、これは地元のご協力なしで出来ることではございません。

現在、竹田城のある虎臥山の土地は、石垣に囲まれた城跡部分が和田山町の所有、山腹の雑木林や植林地が地元数氏の私有林となっております。

言うまでもなく「竹田城址」は国指定の史蹟として天下に知られておりますところから、文化庁の指導監

督も強力で、地形の変更や工作物の設置などは許されることではありません。また、城壁に続いた私有林の部分についても、城の外構えとしての貴重な遺構が各所にみられるなどで、文化財保護の立場から妄りにこれを侵すことは慎しまねばなりません。

しかし、山名氏・太田垣氏・赤松氏の三者にとっては、この虎臥山こそが聖地であり、他の場所では意義を失うわけですから、用地入手は暗礁に乗りあげたような状態になりました。

この苦衷を救ってくださったのが、和田山町当局の首脳各位であり、地元竹田地区の有氏であります。つまり、山上駐車場に隣接する桧林の一部を用地にしてはどうか。そこなら南千畳の壮大な城壁を仰ぎ見ることができるし、眼を転ずれば、播但国境の山なみが見渡せるしという話です。そこで、早速に実行委員会（発起人中より委嘱された四名で構成）で現地検分の結果、そのおすすめに従うこととし、土地買収の斡旋を願い出ました。

農山村の人にとって、先祖伝来の土地を手放すということは大変なことなのです。事の是非とか金銭の問題とは別の次元で愛着限りないものがあるのですが、それを抑えて六十平方メートルの用地を割譲くださった土地所有者の西垣信男氏、同じく成長途次の立木多数を伐倒して展望空間を用意くださった吉田正喜氏と、その間の周旋にご奔走たまわった田中一郎氏・藤本重之氏・岡村精一郎氏のご高恩は筆舌に尽せません。ただただ感謝あるのみです。

(三)神鍋石材さんのご配慮

さて、残るところは施工業者の選定と発注です。ところが、このたびの供養塔が、手の込んだ宝篋印塔であり、しかも、中世の名作にならうよう注文がついておりますので、石屋さんとしては敬遠したくなる類の仕事らしいのです。数軒の石屋さんに交渉したりしましたが、結極は但馬屈指の老舗である㈱神鍋石材さんに落ちつきました。

これも不思議なご縁というのでしょうか。全国山名

氏一族会の相談役に専修大学教授の太田順三先生（中世史）がいらっしゃいますが、先生のご実兄がこの神鍋石材社長太田晃太郎氏なんです。そんなわけで神鍋石材さんも商売気を離れて良心的な仕事をしてくださいました。ことに用地が急傾斜地となりましたので、三メートルもの高い石垣を積まねばなりません。当然ずいぶんな工事費がかかるわけですが、当方のふところ具合をお察しくださって、うんと格安にしていただくなどのご配慮をたまわりました。

ついでに付記しますが、この石垣の用材は神鍋火山の熔岩でして、色といい肌といい、他に例のない風格をただよわせております。

四両氏ご一族のご協賛

さきの発起人会決定に基き、事業趣意書と募金ご依頼の書状を、両氏のご末裔宛に約一千通発送したのですが、果してどのような反響があるだろうか。正直なところ目標額が達成できるかどうか、全く五里霧中の有様でした。近年はダイレクト・メールの花盛りです。いろんな郵便物でどこのお宅も始末に困っておられるのではないかと思いますが、そうした中に私どもの手紙も交るわけですから、まず読んでいただけるかどうかが案じられます。見ず知らずの者からの手紙など、ごみ箱に直行するのがおちではなかろうか。さいわいにもご一読くださったとして、どう受けとられるだろうか。山名氏とか赤松氏とか尤もらしい名まえを悪用したインチキ商売だろうと疑われたって仕方がない話です。

ところがです。郵送してから一週間すぎた日に、神戸貯金事務センターから一通の振替便がきました。ご応募第一号ですから、大変な感動を覚えて封を切りました。それから連日のように続々と振替郵便がまいります。中には〇が六つも並んでいて、何度も位どりを数えなおしたような、スゴイご芳志もありました。また親戚一統に呼びかけたのでと、二十名連記のもございました。

それらを整理しながら、つくづく思ったのです。

「赤松氏といい山名氏といい、発祥以来数百年の生命は現に今、脈々として息づいているんだなあ。〝歴史の波に没し去った過去の名族〟と受けとっていた私の考えのまあ、何とあさはかなことよ」

そうした尊いお心を戴して、今回の仕事もそれ以後に続く鎮魂供養のお勧めも、私心を離れて奉仕しなければ申訳ないと、思いを新たにしたものであります。

(五)供養塔落成開眼式典

期　日　平成二年五月二十六日午後一時～三時

式　場　兵庫県朝来郡和田山町竹田
竹田城山上駐車場奥

参会者　赤松氏関係　三〇名
山名氏関係　五〇名　計一〇〇名
来賓　二〇名

次　第　①テープカット〈代表五氏〉
赤松　衛氏（竹田城最後の城主赤松広秀公末裔）
太田垣貴美氏（竹田城五代の城将太田垣氏末裔）
太田垣佐登氏（発願者故太田垣泰明氏会孫）
山名　晴彦氏（全国山名氏一族会総裁）
山本　幸男氏（阿波赤松氏末裔）
②開眼作法
③参列者焼香
④奏楽（都山流尺八・中島夏以山先生と一門）
⑤事業報告
⑥感謝状贈呈
㈱神鍋石材殿
㈱谷本紙業殿
岡村精一郎殿
田中　一郎殿
木村　澄夫殿
西垣　信男殿
吉田　正喜殿
山本　幸男殿

八瀬　孝殿

⑦来賓祝辞

⑧主催者挨拶

※記念撮影

※斉食（昼食）第一次解散

※第二部懇親会（グリーンピア三木）

※第三部史跡巡拝

○赤松氏側　三木城＝竜野宝林寺＝恩徳寺＝赤松宝林寺＝赤松法雲寺

○山名氏側　第五回一族会総会＝多田神社

供養埼建立事業御協賛御芳名

一般には御協賛額と御芳名を表記することのようですが、御協賛くださった赤誠に優劣はないと存じ、異例ながら御芳名のみとし、甚深の謝意を表します。なお、御芳名は供養塔副碑に刻み永代まで芳躅を伝えます。

（赤松氏関係）

臨済宗大本山相国寺殿　福岡市　大塩　月泉殿

臨済宗大本山大徳寺殿　明石市　依藤太久一殿

高野山別格本山赤松院殿　香川県　大森　武範殿

〈以下受付順〉

東京都　赤松　次郎殿　愛媛県　赤松　泰殿

千葉県　赤松　正保殿　愛媛県　白旗　愛一殿

枚方市　赤松　秀則殿　新宮町　田峯　弘一殿

明石市　小林　薫殿　竜野市　八瀬　孝殿

三日月町　船曳　静江殿　坂出市　阿河　準三殿

藤沢市　石橋　直幸殿

高槻市　霞末　正殿
熊本県　赤松　健次殿
岡山県　萩原　初治殿
鳴門市　山本　幸男殿
御津町　平田（中寺護持会代表）　栄作殿
京都市　赤松　昇殿
島根県　松岡　英雄殿
高知県　森本　博氏殿
姫路市　段　武夫殿
大阪市　高井　邦江殿
豊中市　赤松　実有殿
伊丹市　赤松　孝則殿
山南町　依藤　隆一殿
同　依藤　常夫殿
同　依藤　康雄殿
同　依藤　明殿
同　依藤　源樹殿
同　依藤　繁美殿

山南町　依藤　勇殿
同　依藤　憲平殿
同　依藤　憲明殿
同　上野　頌文殿
同　依藤　五郎殿
同　依藤　八郎殿
同　依藤　昌巳殿
同　依藤　博二殿
同　依藤　実殿
同　依藤　孝治殿
同　依藤五兵衛殿
同　依藤　吉普殿
同　依藤　定夫殿
倉敷市　赤松　蓮映殿
岡山市　出井　清殿
東京都　清水　有子殿
東京都　赤松　達也殿
東京都　赤松　養也殿

東京都　赤松　俊也殿
豊中市　直原　弘殿
横浜市　岡垣　博視殿
新宮町　志水　貞一殿
明石市　米田　耕一殿
夢前町　赤松　太郎殿
太子町　村瀬　正義殿
加古川市　高橋優美子殿
高砂市　小林　則子殿
岡山市　長綱　敏之殿
三木市　横山　茂宣殿
神戸市　横山　美芳殿
神戸市　円山　広義殿
大阪市　円山　裕彦殿
神戸市　栗山　宗久殿
日高町　赤松　衛殿
和歌山県　冨上　嘉彦殿
神戸市　赤松　克助殿

姫路市　大塚　元治殿
神戸市　金井　元彦殿
相生市　北条　秀夫殿
三木市　二杉国四郎殿
西宮市　嶋田　良子殿
京都市　中岡　澄江殿
姫路市　赤鹿　武殿
安富町　円山　快広殿
宮田林市　円山　正殿
新宮町　船引　澄子殿
山崎町　浅田　明男殿
岡山県　松岡　晋策殿
神戸市　船曳　和子殿
萩　市　渡部　浩世殿
三鷹市　松本　三郎殿
横須賀市　林　潤次殿
村岡町　赤松　昇殿
京都市　赤松　隆成殿

京都市　有馬　頼底殿
東京都　赤松　悌介殿
岡山市　中井　紀明殿
岡山県　松岡　繁雄殿
但東町　杉山政之助殿
明石市　猪飼　行幸殿
久美浜町　新免　浩昭殿
以上　九六名
計　金　四、二七八、〇〇〇円

（山名氏・太田垣氏関係）
東京都　山名　宗家殿
和歌山県　太田垣佐登殿
豊中市　太田垣貴美殿
〈以下受付順〉
大阪市　三王　紀将殿
大阪市　火伏　正文殿
埼玉県　山名　修殿
東京都　山名　泉殿
中津川市　山名　守殿
東京都　太田垣秀弘殿
出石町　宗　鏡　寺殿
羽曳野市　壺井八幡宮殿
八代市　三王　英寿殿
和歌山市　吉増　欽太殿

大牟田市　山名　静馬殿
和歌山市　尾崎　吉弘殿
東京都　山名　武男殿
埼玉県　小林　政法殿
東京都　及川　敏子殿
広島県　山名　作太殿
大阪市　三王　紀将殿
和歌山市　松　林　寺殿
城陽市　山名　真如殿
豊岡市　西村　久恵殿
池田市　山名　光宗殿
和歌山市　中島　春三殿
横浜市　山名　信義殿
沼津市　山名　啓策殿
指宿市　山名　正春殿
向日市　山名　繁殿
西脇市　宮田久仁彦殿
姫路市　山名　義夫殿

西宮市　山名　朝夫殿
西脇市　宮田　武國殿
呉　市　宮田　昌佳殿
出石町　奥座　信次殿
姫路市　山名　義之殿
田辺市　山名　文雄殿
群馬県　根岸　一郎殿
和歌山市　太田垣照明殿
姫路市　山名　武雄殿
東京都　山田　利春殿
姫路市　山名　保殿
川西市　三王　延昭殿
和歌山市　山名　清弘殿
茨城県　山名　正寛殿
西宮市　宮田　靖國殿
姫路市　山名　孝之殿
竹野町　円　通　寺殿
泉大津市　山名　秀昭殿

東京都　山名　章殿
大牟田市　山名　志一殿
和歌山市　太田垣栄彦殿
東京都　佐々木定道殿
摂津市　山名　年浩殿
井原市　山名　紹伍殿
松江市　山名　哲夫殿
三原市　山名　正雄殿
大阪市　山名　弘宰殿
静岡県　山名　専司殿
鳥取市　中島　憲仁殿
大阪市　宮田　豊久殿
以上　六一名
協賛額　四、二七八、〇〇〇円
（赤松氏関係と同額）

赤松氏 山名氏 両軍陣歿諸霊供養塔建立事業発起人名簿

◎印は実行委員

〈赤松氏関係〉

赤松悌介	東京	上郡法雲寺護持会代表　赤松国際法律事務所長
赤松実有	豊中	奄美大島赤松氏流
赤松秀則	枚方	竹田城主広秀公流
◎赤松　衛	日高町	竹田城主広秀公流　赤松医院長
赤松隆成	京都	竜野赤松氏流　法住寺住職
赤松蓮映	倉敷	竜野赤松氏流　海蔵寺住職
猪飼行幸	明石	赤松流桜井氏系　来迎寺住職
金井元彦	神戸	太尾城主系　元兵庫県知事
小林　蕉	明石	円心公四男氏範公流
鶴田玉澗	竜野	大燈国師（円心公ノ甥）誕生寺、宝林寺住職
中井紀明	岡山	桃山学院大学教授
船曳和子	神戸	船曳産婦人科院長

船曳静江　三日月町　歴史愛好家
向　令孝　上郡町　赤松氏菩提寺上郡法雲寺住職
薮本寿紀　高野町　赤松宮由縁　別格本山　赤松院住職
八瀬　孝竜　野　赤松氏族顕彰会名誉会員　相談役
原　亮介　神戸　兵庫県議会議員　相談役

〈山名氏関係〉

山名晴彦　小金井　村岡山名氏第十四世　山名氏一族会総裁
山名　章　東京　旗本山名氏　山名氏一族会副総裁
山名弘宰　大阪　紀州藩山名氏　山名氏一族会副総裁
山名武男　東京　但馬山名氏直系　山名氏一族会顧問
山名文雄　田辺　美作山名氏流　山名氏一族会理事長
山名正雄　三原　備後山名氏流　山名氏一族会副理事長
山名専司　静岡　駿河山名氏流　山名氏一族会常任理事
◎中島憲仁　鳥取　伯耆山名氏流　山名氏一族会常任理事
山名正春　指宿　亀岡山名氏流　山名氏一族会常任理事
山名繁　向日　亀岡山名氏流　山名氏一族会常任理事
山名保　姫路　播磨山名氏流　山名氏一族会常任理事

山名正寛　茨城　薩摩山名氏流　山名氏一族会常任理事
太田垣照明　和歌山　竹田城主後裔　山名氏一族会常任理事
三王紀将　大阪　備後山名氏流　山名氏一族会監事
山名秀昭　泉大津　紀伊山名氏流　山名氏一族会監事
中島春三　和歌山　氏清公流　山名氏一族会相談役
◎宮田靖國　西宮　氏清公流　山名氏一族会相談役
山名常人　東京　飯田山名氏流　山名氏一族会相談役
山名年浩　摂津　広島奴可山名氏流　山名氏一族会相談役
山名静馬　大牟田　筑後山名氏流　山名氏一族会相談役

〈事務局〉

◎吉川広昭　但馬　山名氏菩提寺法雲寺住職
〒六六七－一三　兵庫県美方郡村岡町村岡　法雲寺（山名寺）
振替　神戸四－一七五一三　電話〇七九六九－八－一一五一

あとがき

◎　このたび、山名氏赤松氏両軍陣歿諸霊供養塔建立記念として、両氏の交渉を平易に解説した小冊子を出版することとしました。最初は執筆を専門史家に依頼するつもりでしたが、考えを改めて、両氏や竹田城に有縁の篤学に思いのままを書いていただくこととしました。その方がご先祖を偲ぶ心情が躍動するだろう。そう見こんで編集したのが本号です。

◎　本号に「第一号」とナンバーを付けました。そのことは二号が出来、三号がと末長く続いていくことを期待してのものであります。どうか来年には「第二号をお届けできるよう有縁各位のご寄稿をお願いします。

◎　このノートが続くということは、顕彰会が続いて行くことです。せっかくできた供養塔です。たった一ぺんのお祭で終わらせないように、そのためにも本誌を可愛がって育ててください。

◎　ご執筆の田中一郎・川濱一廣両先生は共に竹田城下にお住まいで、小中学校の校長先生として、こどもたちに歴史の尊さを教え続けてこられました。竹田に生れ育つこどもたちには、雄大な城壁の景観とともに山名氏・太田垣氏・赤松氏の事蹟がうけつがれることでしょう。そうした意味でも、あの供養塔が果たす役割は大きなものがあると思います。

◎　この冊子の印刷製本については、谷本紙業さんのご厚意を多分にいただきました。社長の谷本政春氏は但馬の歴史にご造詣が深く、ご自分の撮影で豪華な文化財写真集「但馬の錦」を出版されるなど、隠れた美挙をご紹介しておきます。ありがとうございました。

（編　集　子　記）

山名氏
赤松氏研究ノート　第1号

平成二年五月二十六日発行

編集・発行

山名
赤松両氏顕彰会

兵庫県美方郡村岡町山名寺内

（事務局　吉川広昭）

印刷　㈱谷本紙業

兵庫県城崎郡日高町江原